洛の几董はじめて相見しける時

これからの實になる秋を隣かな

なるみ千代倉鐵叟予がもと

にたづね來ませる折の文を

こゝにうつす

難波がた安井舊國のぬしは、もとよりのちなみ深かりければ、此處に至らばたびのつかれをも息めむなど、伴なふものにもかたりなぐさめて、夜舟の蚊をうち拂ひ拂ひ、漸三津の濱邊にあがり、大江のあるじをたづねけるに、予が出坂をまちまうけ給ふの志あさからずなむ侍れば、誠にさくやこの花の都人の情、かのから國の梅酸のそらごとにはあらず、その厚きを謝して一句をつゞり賀し侍る。

乾く日も更に

なにはの梢かな

己卯中夏日　藏六岡

七十二叟書

(一)梅酸云々は、曹操の兵士渇に苦みし時、近くに梅林ありと欺きて一時の渇を醫せし事をいふ

○以下下卷

一　西山宗因に俳諧の去嫌を問ふに、因曰、むかし昌琢新式を講ぜられしに、何はなにに嫌ふ、他は准之と云々、この准之とあるが第一要語なり、其准之とある、准ずる人の了簡よきもあしきも其人の旨に依る、俳事又准之と申されしとか

元日のうら打つ風やけさの秋

形しろやあとに流るゝ秋の水

大坂やまつりの跡の秋のかぜ

秤口のにしに聞えてけさの秋

秋立つや持佛の箔の目にかゝり

民家

かつしりと鍬に音ありけさの秋

桐ちるやうめの暦の下の卷

駝鳥といへるものを

桐ちるやみぬ唐土の鳥はみぜ

(一)けふと暮れして二日のかげも秋の月

なりひら清女などのことの

葉を思ひて、枕の草紙の趣

にしたがふ

彦星よこれ牧方の馬やらう

ほしあひや石ともならで待課せ

中に落つる星や七日をよしの川

しのぶれどあの光也ほしの戀

御祓せし水にもあらず天の川

ある妓家にてほし合を

(一)正徹「なか〳〵に見ぬ唐土の鳥はいでゝ桐の葉もとせ秋の夜の月」

七夕の今宵大ほし力彌かな
(一)

此句餘りけやけくいかゞ也と、申さるゝ
かたおほきよし沙汰あるにつけ、思ひ出
し事あり、ひとゝせ東武にて雪中菴の
附句に、おれも是から醫者になるはずと
いふ前句に、雪中、ひそ〳〵と矢間千崎
堀小寺と附けられ候、其序魚汶連丈など
いさめて云、おもしろき句ながら浮世め
き候はむ、こゝは間神崎などとあらむに
やと申す、蓼笑て夫にては近代にて遠慮
もあり、實にはまりてもいかゞなり、都
て和朝のてあそび、源氏いせ物がたりな
ど、上古の人あながちに不可尋其作者、
只可翫詞花言葉而已と、戸部尚書もおく
書あり、これらをいふにあらねど、俳事
又八雲の末なればと下略、ちからとあ
らむには風流なし、七夕のあふほしとつ
づけて力彌とされたる宗因の風致をお
(二)
もふばかり、ひとゝせに數千の句をいひ
捨るうちの我なぐさみなり、我にはゆる
せとありしひとつの癖と、大樣に見なし
給はれかしと

戀ひ〳〵て花よりほしの七日かな
送られてみなしらぬ火と成りにけり

鶴脛かゝげて商ふ叟を見て

中々に死なで此世を麻木うり

(一)「大ほし」を「逢ふ星」にかけたり

(二)「風致」原本「風到」とあり

草市やいづれの家のたまの床

瓜茄子さゝげを畫きしに

たま棚の花ぞむかしの櫻鯛

魂だなや雛傳(カシヅ)きし影法師

たままつり八千世諷ひし一座なり

うらやまし迎鐘つく他(ヒト)のおや

たて濟す其夕ぐれや高燈籠

影さすは月に成りしよたかどうろ

露下梧桐一葉飛

棒桐のいま二葉にとなりにける

子はかくし親はかくれて踊かな

をどり子やまだ片形のたつたひめ

眞中へ旭のいづるをどりかな

人の親のちやうちん赤き踊かな

さとの子のおしやられたる踊かな

上毛小塙地藏奉納

盆のはへ地藏まつりにしくはなし

痩せたかと背中みせけり盆の月

初月のかけかた過ぎぬ芋の莖

桐ちらできのふも過ぎし暑かな

舟ばりの露にかげろふ花火かな

八朔もからゝ三八あけはなれ

途中吟

いなづまや不二の麓のはなれ杉

稻妻や乞ひ草臥れしあめの空

いなづまや鐵漿つけかゝる妹が顏

雨の萩うらがれて見ゆるあはれなり
追はであれ萩喰ふ馬畫にかゝむ
ちる萩にうたれて萩の咲きにけり
一　空摩居士物故のまへ、今の雪中庵のするがの國に行脚とてたび立ちける餞別にとて、あさがほの花を畫て、ちるともちらめ蕣のとありし俊成卿の御うたは、かのから國の桓溫が枕をなでて人と生れては、たとへ臭きものといはれてなりとも、世に名ののこれるやうにとの心はべにおなじ、つとめよや道の修行としたゝめて
あさがほやおろかながらも花心

白麻と兩人へおなじ樣にかきて渡されし、其行脚の留主のうち故人となり申されて、今はかたみとなりし事よとて、完來ぬし右の畫讃をみせ申されし、遺訓の心通じけるにや
おもひ出や蕣の花の手折らるゝ
蕣に鉦鼓のあうてあはれなり
あさがほや今更ひるをふみこたへ
これは秋のすゑに申しける句也
あさがほに傾く塔のしづくかな
之も元興寺にての吟なり
蕣の松に並びて旭かな

手折る間に秋風たちぬ女郎花
吳逸が家を訪ひて
肌寒き秋のちからや堺筬
一　なるみ千代倉蝶羅云、我は酒屋なれば能き酒を造りて、俳諧はをりふしのなぐさみなり、知ある人の藝を好きたらばあそぶべし、ふけるべからず、狂ふは彌あしゝ、其所は飛脚屋なり、通路の事にくはしくば、扨たのしみに遊ばれよ、家を捨て業を止めて名人上手になるは、夫人によるべしと申されし、又江戸藏前祇徳といへる人の
風月より家業はおもし傘の雪

(一)徒然草にある登蓮法師が、雨の日にまゝほの薄の事聞きに行かんとせし事をいふ

とかゝれしもこれに同じからむや
酒造る桶に音ある夜寒かな
尾陽鐵叟を悼む
この頃おほき世や更にと、
なき人をいためるいにしへ
人のことばも思ひ出て
世のゆめや西へ見おくる秋の雲
嵯峨の重厚加古川の山李な
ど花屋がうらに案内して
雨の日の薄にも似た案内哉(一)
聲かれて夜寒の禿不便なり
かへ駕の曉寒し宇都の山
朝寒やつくぐと蚊のうしろ影

月落ちてひとすぢ蘭の匂かな
きのふみし馬舁入れぬむくげ垣
夕がほの實も市に出て朝寒し

麻生庵の詞を思ふ

長松がおやと申して西瓜かな(一)
鳴かうかと髭かきあげてきりぐ〜す

人家

きりぐ〜す猫にとられて音もなし
ふたりぬる夜は面白しきりぐ〜す
媒に追ひやられけり蟋蟀(二)
とんぼうや岩切り通す水のうへ

關東道者のよし野よりいづるに

とく〜の水も呑だか赤とんぼ
とんぼうや秋としもなき眼玉

信州簑虫菴承和坊勸進

みのむしよ月のある夜は出て語れ
月にも鶴人、花にも鶴人と
あけくれむつみ交しも、い
つしかそこの國にかへりて、
能き友ひとり失へる事を
秋はものの松見ても其人戀し
霧雨に小室うたふはたれが馬(三)

耳烏齋ぶりの畫をかきて

蟷螂の斧九太夫やよこ車
松むしやひるをば何と瓜のさね

(一)野坡「長松が親の名でくる御慶かな」
(二)きりぐ〜すの切るといふ緣起を厭ふなり
(三)小室は馬方の謠ふ小室節

芋うりや月にわかれし秋の聲
からめくも秋の聲なり夜はまぐり
日の辻や雨こぼし行く秋の雲

北濱といふ題を得て

雲こぼす雨にもちらず市の秋
鰐の居る海たひらかに秋のくれ

糸瓜の畫

洗へとや三千人のあきの水

をとこ山放生川のほとりにて

鯉桶の水そゝぎけり女郎花
一ばせをの翁加賀の一笑が塚にて、塚もうごけ我泣聲はあきのかぜと、其後に駿河の府中籠つくりの九兵衛といへるおやぢの死したるに、又此句を書て手むけられしは春なり、門人かれこれいぶかしく思ひたづね申しけるに、答、九兵衛が死したる頓に聞ておどろき、一笑を悼みたる時の心に同じく、外にいふべき詞なくして認めたり、世の人の噂はともあれ、我泣聲は春ながらも秋の風とおもふべしとなり、八文字を換骨して春となし申されし情、鬼神も虛空に聲をのむべし

見ぬ戀や夜のあらしの荻をうつ、
あきの風まづ荻に來てけたゝまし
雨過ぎて庭の荻原しづかなり

九つの花みな空しけいとう花
若たばこほしたり伊勢が家のあと
青なしや薄刃わたせば秋の水

江戸青山邊にて

南瓜の一番首や組やしき
世の中や紫蘇にまかるゝ唐がらし
唐がらし舍利に成てもまだからし
木がくれて大内山の唐がらし

一　良能あるとき一卷の變化を說き申されし序、物がたりに、むかし淨るりの作者近松門左衞門、國性爺といへる狂言をつくり出して大あたりせし跡を、猶おもしろき趣向もがなと枕をわりし工夫にわたる、其時の芝居ぬし竹田近江申すは、作者の心にはさこそ存ぜらるべきか、去ながら大あたりのあとは、大體すらすらとしたる事をなしておかるべし、國性爺にてよほど德分あれば、一二年不當りしたりとも、我等式がたべるほとは澤山なり、其間は古きものにても出し、其内には自然とよき狂言も出候はむ、夫よりうへそれよりうへと、趣向に趣向をかさねたらむ、かくもてゆかば我家業は盡果て申さむ、たゞ天然にまかされよと申したるは、一道に秀でたるものの詞諸道に通じ、俳諧の一卷の變化もこの心專要なるべしとかたられし

ならの宿にて

鱠うつ宿の外面やしかの聲
雄にみせそ雜水にひたす鹿のつら
夜の明けて山の高さよ鹿の聲
ひとしきり鳴子音して日は入りぬ
鳥有てけふも暮らしつ鳴子ひき
百舌鳥鳴て曉杉のしづくかな

谷風梶之助が畫に

關角力霞とともに出でけるか
あの腹に宿りしものか角力取
撫でられて母に身をまかす角力かな
すまふとり並ぶや雨のひる餉どき(一)
のり掛の角力にあひぬ宇津の山
からくして厠を出でぬ角觝とり

防人の名だたる谷風雪見い

づみ川などと呼ばれしつはもの共も、早二代のものとなり、見物につれだちし好人の家も、既に二世三世の人に伴ふ、我身ひとつはとよまれし歌には似げなけれど

五十年角力を見たり福祿壽
大井子がめしを喰たる角力とり
出女の物ぬふかげや秋のくれ

(一)嵐雪「角力取並ぶや秋の唐錦」

不知明鏡裡

抜き盡す白き鼻毛や秋の暮

百里來て袴づとめや秋のくれ

妹がりの分別いでぬ秋のくれ

新宅に鰰わたるや秋の暮

大磯にて

鳴立てあとに宿引をとこ哉

たちもせで鳴二羽ならぶ夕日哉

嘆々深草裏

むし聞くや古禰宜ひとり誘ひ出し

なくとばかり聞きなば蟲の笑ふべし

籠明けてうれしき蟲の聲聞かむ

肌いれてうづら聞きけりかはらけ師

磯ばたや日のさす粟にうづらの子

風ほう〳〵うづら見せたる草のはら

一　宗祇法師名月の句、ひとゝせの月をくもらす今宵哉、又雨のふりけるときも、此句を誦して用ひられけり、詞は古きを以て心あたらしくせよとのしめし、いろは四十八文字みな切字なりと申しおかれし故人の金言こゝにありと、淡々老人門弟にかたられし

ぬれいろや飯一濱朝の月

月の夜や聲細々とあぶら賣

藏移亭の反古をさがしけるに、いとなつかしさもいや

(一)立入は出入の誤なるべし

まして、かの貫之定家の兩卿天王寺の烏井にのこされし事などおもひいでて

月にうつれ忘れてしのぶ人の顔

百千萬刧菩提種

ひがんの蚊釋迦のまねして喰せけり

凡十ぬし須磨の行きかへり

九度になりし折、一集を催されし、猶たえず通行し給へとて

見のこすな月見の松もいま二本

此二本といへる事たづねし人のありしにて思ひいでらるゝは、いつの頃にやありけむ、殿下の君立入の去畫工をめし、(一)御襖に須磨の風景をゑがくべしとなり、即つかうまつりまゐらせしに能く出來たり、但し月見の松今二本たらでやと仰あり、かの工は須磨の近きあたりにうまれし者なれば、いかでかこの處の事にあやまりぬべきと思へども心すみがたく、其後國にかへり須磨に至り、月見の松をかぞゆるに十一本ありし、我畫て奉りしは九本なり、ふしぎにも恐入て、御内の衆にうかゞひしかども、いかにたゞうち笑ひて語られず、としを經て又承りしに、いつの頃にかしのびの御遊ありて、

よくおほしめしこめられし事と、みそかに承りて驚き入りしと、卽畫工のものがたりなりし

をさまれる月に鶴なく夜半かな
入る月や鵜のわたるあまの川
荻なりて月半天にさやかなり
有岡のさとにあそびし頃、
呂東ぬしの案内にて、月もやどかるといひけむ昆陽の池の堤を巡れば、今宵の淸光いづくにかある、唯水面しろがねをうち敷たるに、ひとしく一瞳一物の外さらに物なし
影滿ちて池一輪の月夜かな
鎌鍛冶のまだねぬおとや秋の月
囊中自有錢
酒買うてかはらむ月の渡し守
野に立て月存分のながめかな
北上川に舟呼ぶ聲の夜毎に聞えて、さびしく又あはれに秋のさまを思ひ、國分氏のもとへ申遣す
舟に聲巴狹の月の猿よりも
不二庵伊賀へ月見にまかで申さるゝを

我みちの魯國の月見うらやまし
伏見のぼり舟のかしましき事を
名月はちやうちんゆるす夜舟かな
信夫呑溟懷舊
水流れ人去て唯月ばかり
鐵屋几掌は萬にたのしき叟なれば
ひとりかへる道又月も淸からむ
月の夜墨江にて
我も見たり七十年の松に月
まつ宵や情のまじるうす曇り

一　おにつら曰、誹諧の道はあさきに似てふかく、易きに似てつたはりがたし、初心のときは淺きより深きに入り、いたりて後は深きよりあさきに出るとか聞きし、むかしは初中後を經しかど、今は其修行する人だになく、心みなさきにはしり、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし、これをおもふに誹諧はたゞ當座あだ口にして、根もなきいひすて草なりと、かろき事におもへるなるべし、これも又和歌の一躰とかきく時は、かりにもあさ〳〵しく思へるはほいなき事にぞ侍ると

名月や月の名所は月にあり

花雪と見捨て〳〵て月の雁
粟のはなふみし夜もあり今日の月
あかつきの雨にもあへりけふの月
西みればまだ夜はふかし今日の月

我家池魚の災にかゝりて、(一)
人々ひそみつゝしめる中、
おのれに過ぎたる造作のさま、いかいあはう宮とや笑
ひ給はむとて

足代の山兀としてけふの月
名月や更けて皆鳴る荻すゝき
月今宵荻も音せよ萩もちれ
十六夜や雲により添ふ月の痩

(一)池魚の災は火災をいふ

あさがほのかげかすかなり十七夜

夜半興行續一夜松

北野天滿宮奉納

御意に入らむ北野の森のうめ紅葉
紺かきの火おこすかげや秋のあめ
あきの日のくれて馬呼ぶとぼし哉
山見えて秋ひとときの入日かな

仙臺しほせ布朴かたにて、和歌の友のよりておの〳〵當座ありけるところへまゐりあはせしに、題のひとつ餘りぬるに發句いたすべしと申さる

名所礎

衣うてやあつさは昨日けふの里
夜は夜とて箔やが妻のきぬた哉
若い衆や近所の砧うち歩行く
媒もきぬた打ちけり宵のほど
雨催ひ須磨のきぬたの通ふなり

一　良能曰、初心の修行はいかにも無分別つよきと思ふほどの句をする人、上手名人の場へもいたるべし、初からおとなしく姿情とゝなひ侍る人は、功者といふ中途にて終るべしと、細川公の耳底記にもしるさせ給へり、すべての藝能みなかくあるべし

から衣下手にうたせて寢入りけり
寺のきぬた念佛にあはで月白し
母のきぬたつま持つべしと思ひけり

閨怨

留主の砧江戸へひゞけと打たりけり

一　雪中庵曰、ほ句を案ずるに心にうかび、我にめづらしくしたゝめ見るに、不思も前人の趣向におなじやうなる句がいづるものなり、是かねて聞き感じ心裏にのこれるものか、又は案じその境に行きあふもの、故人の句に彷彿たるあり、皆好の道よりいづるものにして、初心惡功の入たる人の他の趣向をぬすみ

て、一二字を入れかゆる事などとは混ずべからずと語られし、我もちか頃

後シテや月のおもても痩女（几董の句に似たり）

飯だこや朝紫のひとしほり（巴人が句に似たり）

水鳥のかしらならべて朝日かな（布舟が句なり）

猶去秋の句、ほたもちは小豆のかたにあきの風と案じて、我もをかしく人もめづらしと申しぬ、其後ふと江戸の春來が東風流といへる集中に、附合の句、ほたもちはあづきのかたに秋の風とありしにおどろき、句帳を脱したり、故人の句に作者のちがへるもまゝあり、かやうの事にや有りけむかし、しかれどもつねぐの俳力を見て、人の句をひらふものと、古人今人の句に同巣の句をなすものとは、一概にこゝろうべからず、人こそしるらめ我句の事をいふにはあらず、世情のあらましをのぶるものなり、見む人ゆるさしめ

樂頭の眉しらけたり秋のかぜ

吹きぬける鱸の口や秋の風

反りかへる鰺のひものや秋の風

いつしかにかわく砂糖や秋のかぜ

北越のならはしを

三越路や雪に追はるゝあきの風

八十島といふ所にて

秋風よのさらしぶりの歌聞かむ

洛の蝶夢あづまの卷阿など

伴ひ、住吉の升市に詣でて

高拜殿千珠滿珠の丘などを

しへ侍りて

松に月玉出の岸と申すなり

おなじく十五日四天王寺の

念佛會伶人の舞樂をみて

月さすやはちすのうへに舞の影

夜半亭有文の二子を伴ひす

みよしに遊びて

たがうゑし松にか千代の後の月

日の色や野分しづまる朝ぼらけ

木犀の思出しては句ふかと

杏谷子へみづから彫し石印

をおくりて

おし分けてめでよ花野の品さだめ

手折らましとても數ある花のはら

川こす人の直段をきはめて

八十文川九十文川などとい

ふも

水に日の價や秋の大井川

義仲寺芭蕉翁塚名錄集

とりとめた風こそ見えね花すゝき

花すゝき吹かれながらに日は入りぬ

一曾呂利は滑稽の人也、太閤秀吉公或

時諸臣に向はせ給ひて、世に恐ろしきものはなにならむと仰あり、君こそ恐ろしきものの頂上にて候と、一同に申しあげたるに、坊が曰、御前樣ほど恐ろしからぬ物はなし、手柄をすれば御はうび、あしき行ひあれば罪を御糺し遊さるゝ、よしもあしきも我心にあれば、君は恐ろしきものにこれなし、たゞ世に恐ろしきものといふは、無分別ものにとゞめ申したりと申上げければ、公大きに笑はせられ、諸士もあつと口を閉ぢたりしと、からくにの東方朔、我朝の杉本、あつぱれの俳諧なりと、駿河の乙兒はなしなり

駒牽やけふ切立の白ふどし

琵琶と號しゝ手水鉢に

伯雅に柄杓とらせむあきの風

いざ攀ぢてきぬた聞きたし塔の上

細脛や寢覺る老もたつ鹿も

大かたの草におくれて尾花かな

江戸曙烏子をおくりて

まねくらむおくる薄にまつ尾花

一　蓮二坊くずの松原にかける、この頃一般の才人恐ろしき詞をもて、針灸祕訣の諺をのみめづらしといひ出たるに、しらぬ人はしらず、知るものはいかに淺ましとかおもふらむ、下略

(一)朗詠、踏花同惜少年春

此しらぬ人はしらず、しる人はいかにをかしからむといへる、世上大かた此そしりのがるべからず

川口逍遙

淺づまに鰤の雫をあびせけり

少將にかしらはられしふくべかな

なにがしの殿に似たるよたねふくべ

蕎麥咲て花の都とおもひけり

そばの花峰は淺間の夕烟

茸を蹈てはおなじく惜む小めろ哉

(一)狩人にたけ守めでて山易し

二の足にふみ潰されしきのこかな

放野群牛引犢休

いねかりて天地にこはい物はなし

ふくむ木を落して雁のはつ音哉

船たてる烟のすゑやかりの聲

雁鳴て菊のひと枝つぼみけり

花と呼ぶ鯛より鮭のもみぢ哉

九月九日高津の宮に詣

たかきやにけふは栗むす烟みむ

酒ことし一二の船のきほひかな

雪も解けよ不二見て過る新酒の香

一　細川玄旨法印の、我も大廻し三段ぎれの仕やうは習ひたれども、いまだせぬほどに、もはや一期すまじきなり、人のしらぬ事つよくしたがるは、まぎらかし

の下手の事なり

さればこそ花におもひし野分かな

紹巴が一段ほめて、扨かやうのほ句は重ねて御むようなり、さあれば人がしたがりてあしきなり、耳底記にかき給へり

孔明がやぐらの琴、義經のひよどり越、それらは無據事にやあらめ、今どきたまたま物おぼえたる人の、三段切素秋などと好ていたさるゝは、氣のどくなりと、魚汶のはなしなり

置けや露菊よりのちは花もなし

あらそはぬ秋とは菊の上手かな

菊簞笥通して起る野菊かな

露帶てあるじも立てりきくの朝

馬牽て菊一本の所望かな

きくおなじからず然るにつくる人

菊あはせ花ものいはゞ歎ずべし

鱧たゝく音は隣かきくの花

我ものと成て十日のきく淋し

起き〳〵て菊に十日の朝寢かな

老みせじ〳〵と菊にこてふ哉

十三夜

名月の其夜は丸しけふの月

兎の子百目になりぬ后の月

畫讃

夕霧に立ち盡したるかゞしかな

大かたの月を見果る案山子哉

霞ませて尾上に見たきかゞしかな

清水うかむせ四郎右衛門か

たに芭蕉翁の一軸あり

松風の軒をめぐつて秋くれぬと、これ翁花屋がうらにて遷化ありし前九月廿六日

したゝめのこされし物なり、これが祭を後々まで執行はむと、二柳庵のぬしあらたに松風會といふ事をはじめらるゝに

いく千々の秋吹きわたれ松風會

たかのの御山にて

あさ霧や御廟にまゐる兒の聲

うらがれて不二三尺のたかみかな

中山由男舞臺納

夜噺もこの人の事千々のあき

雪中庵蓼太空摩居士九月六日身まかり給へるに悼の句

呼びかはす聲や霞のうらおもてと、春の文のめでたかりしも、ことしの秋のたよりはかなくて

そなたぞとふり向けば唯秋の空

暮秋

くれ〳〵て秋の行方や雨の音
翌をいかにさびしき秋もなごりなり
あきの月九月も二十九日かな

初しぐれ露のうたがひ解けにけり
うら菊のそよぐばかりや初しぐれ
神のたびかしま殿よりしぐれけり
月はまだ有るかなきかに初しぐれ
初しぐれいはゞ關寺小町かな
　をはりの巨舟ぬしを送て
たびがさによし降るとても初しぐれ

一　淡々老人の曰、むかし水無瀬の上皇の仰に、春夏のすがたはふとく大きに、秋冬の歌はほそくからびてよむべしと勅ありし、我俳諧もこれにならひ奉りて、四季のほ句もその心をもて詠ぜむこそ、本情にかなひ侍らむかし、又竪の題はおもしろく、横の題はうつくしく作せむも俳諧ならめと

半時庵淡々二十五回忌
しは〳〵と浪に入る日やうめの花、と書きおくられし
たんざくを取りて
香は今も其ふたむかし冬の梅

一　古物語に細川三齋より太閤樣へ獻上の兜立ものは八日月なりし、又千の利休よりさしあげし石燈籠火袋のすかし八日月なり、物そのわかち有りながら風流の心ありしと、人々感じ申しけるとか

爐びらきや泥鰌の光も八日月

としよりに來年を問ふ小はるかな

初霜やひと足すべるわたし守

夜半亭几董はじめは春夜樓といへり、去とし東都へ下り、初代の夜半翁がすまれし石町のかねのほとりにて、雪中庵など俳諧ありて、二代目蕪村のあとをしりて、夜半亭となのられしは、ひととせふたとせのうちにして、酉の十月二十二日伊丹なる士川子の別莊にて、はからずも身まかり申されし事をいたみて

二度の名もうしや小春の夜半の聲

冬日

日あたりや寒菊も子を儁すほど

たま〳〵に鳥なく冬のひなたかな

豐後の人の國にかへるをおくる人にかはりて

しぐれずに笠縫の島に見るまでは

花屋がうらの事

一ばせを翁なにはの夢とむなしかりし旅やのあとは、御堂前花屋のうらとばかりにて、さだかに其處をもたづね申す人なし、我も久しく此事に志ありながら、能きよすがもなくてうち過ぎぬ、今年いかなる幸にや、をはりの千世倉蝶羅、翁の古きあとをたづねばやとのおもむきにて、羅川十叟雄山の二三子心をあはせ、かろからぬ御しるべをもてかたらひよりしは、南の御堂前南久太郎町花や仁左衞門といへる人にて、元祿のむかしのまゝに家つゞきて侍るが、これがもちつたへし地は、花屋のうらといふめり、又寸馬呼見の兩子も、かの仁左衞門とは故ありてちなみ侍れど、此家こそかの舊地といふ事をも聞侍らざりしに、ふと物の次手に此事申出せしも同じ頃にて、おのおの手をうちて悅にたへず、さらばかの亭をとかりものし、羅川十叟これが主まうけをなし、石漱雲亭其席の事にあづかり、都て連衆十八人うちこぞり、懷舊の一會を催ふし、はるかに翁のたましひをまつり奉りぬ、又樵風といへるは之道の孫にして、蕉門の志を起し、花屋のあるじも生木とて、これも我徒のみちに入らむとのあらましにて、かれこれうちかたらひ、そのかみ翁かれのの吟、かつ丈草のくすりの下と誦し申されしのち、たえて久しき舊地にて、かく文臺を立て之

道の孫弟はなやのあるじの一句を手向申さるゝは、祖翁の靈神さぞ嬉しとやおぼしめすらめ、風雅のみちたえず、因と緣との薄からざる事よと、涙もおつるばかりになむ、今そのおもむきを書きしるして、翁をしたふ人々に、其古き跡の正しくのこれる事をしらしめ侍るものなり

枯野見しかりねの夢や八十年

くすりの下をおもふ埋火　羅川

其節諸國よりあつまりし短册は、みな花屋仁左衞門に納む、かつばせをの翁元祿七年九月奈良より大坂へうつり給ひ、十月十二日物故ののち、あふみのあはづ寺におくりし毎日の事實、おなじく花やかたに藏之

大坂のばせを塚は天王寺毘沙門坂の下藥師院といへるに有り、卽門人野坡叟の造立にて、表の文字は堂上がたの御筆、うらの銘文は筑前の醫香月なにがしの作る處なり、六行會といふものにくはし　其のちいかなる事にや、野坡門人梅徒といへる人、天王寺椎寺のうしろに塚を立てしのちは、此塚たれまつるものなかりしにや、寺も今は時宗となり遊行寺と呼ぶ、塚も臺所のせど口にありし、明和七年庚寅の十月、寸馬舊國こゝにたづね、位牌なども往し野坡の納めしをもとめ出して祭事三四年、そののち加州の三四坊二柳この塚を寺の前にうつし、年々會式俳諧あり

翁　忌

しぐるゝやむかし夜伽のかゆの音

ばせを忌や長良の山もけふこそは

芭蕉忌や其角が餅の冬牡丹

行燈の糊につたふや冬の蠅

御命講やあさ日を拜む御上人

おめいこや女中の法花けふばかり

人投げて念佛申す十夜かな

若後家のことしも出來て十夜かな

ちりめんのおめこ紬の十夜かな

一　雪中の叟夜ばなしに云、句のあたらしみといふは、古よりいでて別に奇を求むるものにあらず、ある娘の子のいと寒かりし日に、友どちとの咄しに、風も寒いかしてふところへ入たといひし、去は寒は動かぬところ肌に通るは本情なり、ふところへ入るといふが、あたらしみなりと申さる、魚汶の曰、この頃も去寺にて、古御達のよりあひて、扨々今どきの嫁共は、かへつて姑どもをなかせます、左樣々々わたくしも隨分きげんをとるが當世ぢやと申しあひたり、そしるは本が當世ぢやと申しあひたり、そしるは本

(一)古御達は老女の義、原本「古後達」とあり今改む

情にして、泣かせらるゝとあやまりがほに申すがあたらしみならむと、倶に笑ひて茶を過しぬ、山幸のいへる、巨燵にいくたりもあたりてねるは、菊の花の咲たやうにと、支考がかけるも是なりと笑ひて、又一服を過す

爐の灰の暦にかゝる冬至かな

山本羅川七回

亡人戀しき折ふしごとや、

ひとゝせは冬の日、又の年

ははるの日と、かぞへ〳〵

てことしのけふの手むけに

は

はや七部のち猿みのにしぐれけり

京淋ししぐれ狩して遊ばうよ

風吹けば木にも萱にもしぐれけり

落付て牛の物喰ふしぐれかな

夜半几董身まかりし事を江戸の成美がかたへ申遣すと(一)

て

おどろけや驚くな此世のしぐれ

師走野や鶴追ひのけて麥を蒔く

乳追うて破魔矢ほしけり冬日向

正面に祠堂のぬしや御取こし

知れる關取の年老て杖にすがり本願寺へまゐりしを見

(一)「身まかり」原本「身かり」とあり、誤なれば改む

て

御取こしや三つ輪ぐみたる角力とり

御火たきや宮司がをとこの鼻の下

芥にもならで果てけりかへり花

一　良能云、世に來山の門松やめいどの道の一里塚といふ句をもて、禁忌なり、いかにあたらしき事をいはむとて、風雅の罪人になれりと云ふ人あり、これは來山がすみける家のうら家にすまひせしものの、大卅日に身まかりけり、來山が隣は家ぬしにて不斷は庭を通せしかど、元日なれば翌こそと申し、うらのをのこはやもめにて、遠き親類などのとり賄ひたれば、はやくとり仕回ひたき人なるをと、來山聞てきのどくがり、我は世をのがれたる風人なればかまひなしと許して、元日の夕かた我家より野おくりを出しやりての詠なるよし、夫を罪人といふも又道を重んずるの謂にて、殊勝には侍れど、物は其時の樣を能々考へていふべし、人の句を聞かむもおなじ

口切やつる松太夫いまだ來ず

くちきりや御次は奈良のあられ樽

御師どのに灰かづけけり春の畦

羅川十三回

十三年その霜月のしもはおく

鳴きながら霜ふるひけり明がらす
朝霜やおしなべて鴨のぬはれ伏

伏見船中

むろにねる梅さへ有るに笘のしも
うかく〳〵と白ぎく老いぬ霜の朝

岡橋叙夕十三回

十七年霜置く松はそれながら

上毛湖鏡悼

みなかるゝ草とはしれど此別れ

天満如瓶一周

歸厚堂のぬし身まかりける

又のとしかの舊庵を訪ひて

石蕗の花も其墨染にさけよかし
殘菊や小雨のうつる西日かげ
ほし舍る冬木の梅のたち枝哉
水仙のよく雁かもに煮られずよ
水仙やひともとの花とおもはるゝ
大空は煤にかすめり寒のうめ

中山與三郎がやぐら初に

むかしは嵐、今は中山、三代
のやぐらぬし、是優門の世
家といふべし

三代ぞ外になにはの冬のうめ
すみよしや松の外には大根畠
こがらしや白衣の僧の門に入る
松苗にこがらし落ちてしづか也

(一)芭蕉「時鳥聲横たふや水の上」

月もるや榧の花ちる土手の上

一　活々坊舊宅傳馬町の新道にゐられし時、門人たれかれ寄りつどひ、俳道の奥儀をたづねけるに、其答例の高調子なりければ、門人の曰、今少しひきく仰られよ、外面に人や聞候はむと申せば、活笑て、これほどに申しても熟得なきかたも有るに、此みち執心にて立聞する人はすしようなり、呼込でもきかせ度事と申されし

活々を悼む

活々の字もたのみなし枯尾花
はつ雪や家の工に酒汲まむ
やゝ有て雪より暮るゝ野山かな
雪一丈かゝる日に飲めおにころし

(一)鯛あげの聲横たふや雪のうへ

駿河の乙兒國にかへり申さるゝに、我もかみつけにたびだつとて、雪中庵にして

手をわかつ
いざ雪のはなし契らむ不二淺間
蝶有てこのふる雪に舞はゞいかに

家のわざに行來する事四十餘年、半はくるしみ半はたのしむ

月の富士雪の不二とてはたびいくつ

乙雪や未進ねがひの小百姓
雪に駕隠居の轉ぶ所まで
鴨賣の雪かきわけて尾ごし哉
笘もるやたる氷をたゝく磯の浪

一　麻生の云、人に句を見せ相談に及ぶとも、しれた事にても書て見すべし、ことばにては聞きあやまりいひ誤にて、所のたがひめ、五音の不通にて、句の姿情わかりがたく、あたら句を夫ほとに受けとらぬ故、捨ることまゝあり

智者福者申入れたりふくと汁

一　むかしの判者はいかにも覺悟おとなしく侍り、つゞきの原に

ちる梅を梢に返す羽蟻かな

宗祇の發句、ちる花を梢にかへすあらし哉、此姿情のわかり無覺束に、なにともかゝず、左もあしきにあらず、他につがひ侍らば下にたつ事かたかるべしと素堂判也

金屏にことしの雪のひづみ哉
さく〳〵と藁喰ふ馬や夜の雪

三世雪中庵蓼太居士

さみだれやある夜ひそかに
松の雪、右のほ句にめでて
や、明朝の雲南程劍南といへる唐人より、からうたお

(一)「程劍南」は原本「裡劍南」とあり、改む

くりしと聞て　英名たかく
からくにさへもてはやし
ぬる事、このみちの規模分
て雪門のほまれなるべし

雪のあとかゝげて松の月夜かな
雪の日や火桶に硯うちわたし

雪中待人といふ

うさぎ煮て橇の音きく夜かな
鷹の殿鳶が娘を獲かな
ひる過や氷のうへのはしり水

念四坊半僧半俗といへる人の、よしの山に分入りとくとくの水のほとりにて、一つの石をひろひ得たり、其かたち西行に似たるも風流の志こりし處かとて

氷うつて得たりしや此玉かしや
一本のかしはにさはるみぞれかな
ひとりねや御油赤阪のかし蒲團

夜話

幸齋がはなし何々紙ぶすま
つもる事しらで霰のはしる哉
獵人の火蓋をはしるあられかな
炭はねて庫裡に狸のはしる也

終年帝城裡不識五候門といへる事を

(一)新町の遊女屋の主にて謠巻をきはめし茨木屋幸齋

ほだたくや殿様しらず年しらず
寒月や經よみしふる法花坊に

一　山川舊跡したしくたづね入るべからず、まして私に名をつける事なかれ、主あるもの一針一草たりとも取るべからず、山川江澤にもおの〳〵ぬしあり、つとめよや

四季いひ習たる季の詞の外、めづらしく季に用ふべからず、世の人三歩が二も合點の上ならでは季に遣ふ事なかれとは、ばせをの翁行脚文のおもむきなり

たゞし四季のことばにうち添へて遣ふは、又おもしろからむか

上總戸の釘あらはなり冬のつき
冬ごもりこゝろに須磨の月見かな
かれしやら桂も見えず冬の月

有感

けふに成て叶はぬ戀や冬の月
冬の月夜ごとに照るとおもひける
冬の月椋の梢をはなれたり
冬の月人にくもらぬひかりかな
寒梅や韜はづれて五三輪
うめさくや冬の月夜の朝ぼらけ

尼といふ題にて

淸盛の文張てある火桶かな
した〳〵と雨ふる宵のさむさかな

藍に似て寒し野づらのたまり水
あら寒し〳〵と淺間見あげたり
吹立る鴻のうは毛の寒かな
あづかりし人の小判の寒かな
つとめては日を焚く人の寒かな
(一)
あら釜の鐵氣たき出す寒かな

佛につかうまつるべき年頃
なればと、ことし神無月の
末我淨土門の尊き教を受侍
りしかど、いまだ世のわざ
ののがれがたきまゝに
十念につゞく霜月師走かな

尾上菊五郎が京へのぼるを
祝して、わざをぎのいさを
しになくして、なにはのさ
ためでたく都へかへりのぼ
る事を見はやして

東風吹かむたより待つなり梅の冬
莖づけや女にわたるちからすぢ
樓高し寒夜に聲をさらす人
寒聲の若は念佛申しけり

あら書を誦て

生葱や小仙の世を爪はじき
(二)
丸盆につや〳〵白しあらひ葱
最上川この月ばかり大根ぶね
(三)
大根引て松風の音ばかりなり

(一)日は火の誤か
(二)小仙は水仙の誤か
(三)「最上川上れば下る稻舟のいなにはあらず此月ばかり」の古歌による

あくる戸の人より先に落葉かな
聞きなれて糊たく宿の落葉かな
　これは道因法師の姿を畫に
　かけるなり
むさし野を二日吹かるゝおちば哉
　まつ戀の題に
こぬ人やことにあかつき鐘さゆる
　しのぶこそ風情あれといひ
　しに
をし鳥にしらすや戀のおもしろみ
かもなくや衣々(キヌ〳〵)の戸のうしろがみ
鴨の毛や吹亂されて水に入る
星みえてかさゝぎはらむ夜頃かな

千鳥鳴きつゞいて老の念佛かな
　三州國府柳雨子所持あはぢ
　しまといへる貝盃に
疾ほして見よや繪島の浦千鳥
聲さびてねぶとにさはる千鳥哉
雨止てうしみつ過るちどりかな
寒さうに人はいふなりあじろ守
なまこもし柳の露のかたまりか
一　手爾波とゝなはざれば天地の神に
かなはず、我人ともに受けざるところ
有るべし、かの伊勢の團友さぬきの浦
にて、なまこともならで果てけり平家
蟹との初案、認めながらいまだに心行

(一)徒然草「しやせましせずやあらましと思ふ事は大方せぬがよきなり云々

かぬ事のあればこそ、其夜の夢にあまたの蟹にせめらるゝと見しかば、再案、なまこともならでさすがに平家也、是景淸のうたひにも叶たる手爾波自然と備り、句ぶりも格別なりと、我心中に服せしかば、心神ともにをさまり、其夜はいさゝかの夢にも見ざりしとか、又其角が、此木戸や錠のさゝれて冬の月、平家ものがたりのうちに、此木戸は錠のさゝれて候ぞこなたへ　下畧

酢をさせば閻浮にかへるなまこ哉
網子むれてふみ潰されし海鼠哉
ある僧の女の手からなまこかな
　かつらぎの大君の畫に
采女より先へまゐりしなまこ哉
　つれ〴〵を誦て
しやせましかくやあらましふくと汁(一)
叱られし鰒も喰ひたし母戀し
洗ふ事ふぐは外樣にまかせたり
鰒の扉をうつゝや煤の亂れ容
たれやらが脛より白し洗ひ鰒
兼房にさたばしするなふくと汁
分別の字に抛たむふぐの腸
　去ぬるとしの冬、三島の驛
　にとまりし折、ばせを翁の
　すみつかぬとありし詞もお

もひかへして

置ごたつこゝよと不二の見ゆるまで(一)

我は七十婦は六十

かげぼしやこたつに向ふつゝ井筒

老情

脱ぐまいと一町廻る頭巾かな

くろかみと見ようば玉の投頭巾

あかゞりや君にひかれて雲のうへ

加茂の明神勸請の祠奉納

水潛る色も丹塗のもみぢかな(二)

晩年

猫板にかくてぞとしのかくれ里

まちかねて寢屋にほむらの湯婆哉

(一)芭蕉「すみつかぬ旅の心や置炬燵」

(二)丹塗の矢の流れよりたる事加茂の緣起にあり

(三)ちやつせんは茶筅

むつごとも古きたんほの洩れやせむ

石町のかね枕をそばだてゝ

冬ごもりわづかに石蕗の花を見る

拜領の鼠馴付きぬふゆごもり

冬ごもり蠅の古巢をながめけり

七日みる若菜の卷やふゆごもり

過ぎさりし人の事を思ひ出

でて

暦かへばその月と日は有りながら

都のさまも碁うちはてゝ、

けちさすばかり、大路のゆ

きゝのきは〳〵しくも

ちや・つせんや宗左が門(カド)もうり過る(三)

ひとゝせを風にとられつ暦うり

鏡屋のかどに立ちけり暦うり

うしとらと恐しき野をはちたゝき

鹿ひさぐ家とも知らずはちたゝき

山里はさびし都もはちたゝき

何蹈んだ念佛なるらむ鉢たゝき

いとさむしと見ゆる夜の

辻君に衣かられなはちたゝき

北は黄に石蕗咲きぬらしいぶき山

一　支考の曰、風雅のかたはしを心得たるもの、たま〳〵名家の一卷を見て、此句はをかしからず、其句は味うすしなどいふめれど、一卷につらぬる事、あながちに一句のうへを論ぜず、ひと度は雨となし、ひと度は雲となし、中品の眼をとどむべき事を恐るとなり

法然上人の語を聞て

寒念佛目のさめたらむほどは聞け(一)

師走の雨世にある人のほめ申す

寒椿咲てちりけり伊豆が崎

大藪や竹の子はらむ寒のあめ

かほみせや衣に掃かるゝ橋の霜

かほみせやひいきの馬を待ちかねる

寒の紅粉園十郎へまづまゐる

すゝはきや盥のうつる日のひかり

佛名のをはりに僧の笛聞かむ

(一)徒然草に目のさめたちむ程念佛申すべしとの上人の語あり

かん明や三味線ばこに物の音

節分の豆こぼしけり角力とり

一　防人丸山權太左衛門が角力の高名はいふもさらなり、全體心やさしく風流にして、雪中二世吏登の門に入り、俳諧のほ句をなす、あるとき連中の望にて我手のひらを墨にて紙におし形をなし、其かたはらへ

ひとつかみいざまゐらせむ年の豆

かれが身の丈六尺三寸七分、手のひら長さ七寸九分あればよき祝の句也、あらあらしきわざのものながら、かく風流なりしもいとやさしかりける

あひる三度巡りて暮るゝ冬至かな

庚戌十月ばせをのやどり塚にて

我戀は松をしぐれの十二日(一)

茶のために月うちならす氷かな

川風さむき夕ぐれ

とらへよと君にすれあふ頭巾かな

めうがやに一夜遊ばむとし忘れ

としのいそぎにて餅つくあらまし、井のもとにたちまふ下女どもの我はがほなるも、晏子が御者の風情なるにとをかし

(一)慈鎧「我戀は松をしぐれのそめかねて眞葛が原に風騷ぐなり」

かたはらに尻なき妹や米洗ひ

橘の木に引きさきし紙子かな

舟床し鴨が鳴てもすみだ川

驛路寒

雲助が衣紋つけたる蒲團かな

大佛の窓よりたかししぐれ不二

たからぶね賣るや宵間のひとあらし

あはれいかに寶舟うる人のさま

紅うらの衣もらひけり着たりけり

霜鬢明朝又一年

花ちつてのち月雪をとし忘れ

とし忘れ津の國のなに思ふらむ

面うちも見よや師走の人のかほ

たれかをしむ師走の月も十六夜

こがねなる世は面白し年ひと夜

世のいそがしきを忘れむと、なにはの大寺にまうでけるに、年のをはりの魂祭などいへるふる事のおもひいでられ、むすぶちほりのすゑ(一)はかはらじとよみし、しら石玉出の水にむかへば

親にあふとしの龜井の水かゞみ

行く年や白髮をかくすおやもなし

としの市子にまじりたる鯡かな

年の市たつうら町は月夜かな

(一)「ちほり」は「ちぎり」の誤か

としの眉いざ傾城につまゝれむ
寢覺せぬ春の夜ちかくなりにけり
翌しらで三日先みつとは、
松江の叟の不二の雪みたり
し風流の觀相もおもしろけ
れど、我は廉波馬援が老壯
にならひて、猶いくとせの
東行を願ふ
鬢髭も不二と常盤に六十五
とし忘具ひろはむと、なに
はの浦づたひして、住吉の
社にまうでけるに、生茂る
松どものみどりなる枝うち
かはすときは木、きねがつ
づみの浦風にひゞきて、世
の外の心地ぞせらる、まこ
とや無事をもて奇特とすと
いへる御神詫も、ひとしほ
ありがたくて
としのくれ住吉はよき宮所
年ひと夜あらおもしろの飛鳥川
攝州ふく原沙月九十歳にて、
十二月廿五日身まかり申さ
れしに申遣はす
人壽百歳の國にうまれて九
旬を一期とし、はるちかく

見やりて、もとの國にかへ
り申さるゝ翁をうらやみて
たる事をしるや命のとし仕舞
異方の災にあへりし古年の
くれにひきかへて、あらた
なる家に春をまつとて
めでたさや大卅日の夕がらす
立春在臘
はるや來しけさは五つの花の雪
餅つきやこしきがうへの山かづら
既春
初とりやめかりの息のゆるみより
四季のほ句千あまり、すみ
つきの事ぐさ百三十かさね
のもの、みづから筆とりか
き納めて
ふたおやに見せたし今年六十九
寛政二庚戌年十月　（花押）

それ大和歌は天地ひらけ初しより、地の花の天にはじまり、天の月の地にすめる、天地和合の大道たゞちに詞となりて、神を貴み君をあがめ、世を治め身ををさむる道とはなりけらし。先づ梅かざすより桃の雫の盃にしたゞり、菖蒲葺く軒にはのぼり甲なんどを立てならべて、よこしまの氣をしりぞけ、菊の白露は淵となるらむいく世の末までをいひことぶき、一陽來りかへる頃には、をさなき人の髪を置初袴着そめなんどして、神に詣せむとて出たちたるを、老いたる人の杖に腮かけて見送りゐたる心のうちこそたのもしけれ。四海浪しづかにして橋わたさぬ道もなければ、往來に足をだにぬらさず、かくおほん惠みふかく治まる國のためしには民ぐさうるほひて、誹諧のつらねうたなほ萬歳をうたひて、人皆鶴龜の齡をしたふ、かゝる御代こそあふぐべけれ。

おにつら

附言

安井舊國名政胤華名宗二號回心齋又稱大江隣其先出村岡之淸流在武門而姓於小島國初居民間從事銀山之役政容胤道頓之系改姓安井揖北海諸州之產大啓交易場又享保中政勝創東都脚力之職以令末輩參商讓業於舊國職道益盛居士舊國其性淸雅九歳班職中交替兩都者都七十回黽勉不弛者殆六十年以是久任職掌流範于當世大起家聲垂訓于後昆加旃于歌道于俳諧于鎖術于筆鋒各倚名家探其祕蹟專名俳流不必湎其伎而常言夫俳自然聲感事述其志耳不必潤飾譬如花木天生者自然可愛剪裁者容態可惡俳之所貴在語近於耳意徹於神也可觀其志操卓異概如是一時居士遊于松嶼臨扶桑三絶之妙境沈吟苦思未得一句夢寐有感著懺悔一章以演其所自得又嘗西上之辰采途於北陸凡所經歷山川之美驛程之勝悉圖畫之以貺未見未聞衆庶其佗所鈔錄不勝枚擧也予素有師檀契識居士者熟今見俳諧懺悔一帙幸書居士生平萬乙聊供夫懺悔之一端者而已皆寛政庚戌中冬朔

阪陽城南圓通蒙光誌

寛政二庚戌年十一月
大江隣藏板

江戸　西村源六
大坂　藤屋彌兵衛
京都　橘屋治兵衛
板

一茶發句集

增賀ひじりの師の御房僧正の參内のをり、乾鮭の太刀はき瘦馬に乘て供奉し、又皇太神宮の名利を捨てよと、おほけなき靈勅により、やがて赤裸になりてくるひそゝめきしは、僧綱をたまはり錦繡を身にまとひしよりも、なかゝに内心淸淨ならむか。近きころ信濃の國柏原俳諧寺一茶は、元祿のむかしの惟然坊のたぐひにて、上野の坂本町本所番場にいほりせしをりは、晝も行燈をともしおきて煙草火にかへ、或は客來り餉の時いたれば、それとともに店屋に行き食事をはれば、かたみに料足を拂て返りしなど、なべての事辛き世をいともやすげにすごせるものから、四方遊歷のさきゞには奇談咲話人口に膾炙せるもの多し。發句文章もまたそれに隨ひ、頤を解き膽をうばはしむる物少からず、實に一世の俳將なりし。斯而文政丁亥の冬黃泉の客となりしのち、門徒集りて反古物しらべしかど、斯く隱逸のさがにしあれば、いひのこす言葉もなく、さるさうしやうのものさへちりゞになむなりしを、からうじて句集いできにたれど、それさへ藏板とかいふものにて、世におほやけならざるををしみ、書

肆何某おのれにはかりて删補を乞ふ。辭する事にしもあらねば、もとの集の上に自他の耳底に殘り、すりまき消息やうのたぐひに見えたるをも書きくはへて、あまつさへ始につたなき筆をはしらす。

弘化丁巳彌生　　俳沙彌一具

一茶發句集　上

春の部

元日や上々きちの淺黄空
元日も立ちのまんまの屑家かな
春立つと申すもいかゞ上野山
土藏から筋違にさすはつ日かな
鶯のいな啼きやうも今朝の春
あばら家の其身其まゝ明の春

還暦

春立つや愚のうへにまた愚にかへる

新家賀

年立つや雨おちのいし凹むまで
あら玉の年立ちかへるしらみかな
初空へさし出す獅子の天窓かな

草庵二句

庵の春寢そべる程は霞なり
我春も上々吉ぞうめの花

三崎の井は遊女柏木がかた

みなりとかや
若水のよしなき人に汲れけり
若水やそうとつぎ込む梅の花
蓬萊や唯三文の御代の松
蓬萊に南無々々と云ふ子供かな

富士の畫に

初春や千代のためしに立ち給ふ
初春も月夜となりぬ人の皺
　長谷の山中に年籠りして
我もけさ清僧の部なり梅の花
福わらや十ばかりなる供奴(一)
　小兒のあどけなきを
かま獅子が腮ではらへぬ門の松
袴着て芝にころりと子の日かな
折てさすそれも門まつにてれ
小松引人とて人のをがむなり
我庵やけさの年玉取りに來る
初夢に猫も不二見る寢やう哉
逃げしなや水祝はるゝ五十聟
大聲や廿日過ぎての御萬歳
鳴く猫に赤ン目をして手まりかな
　鶴の畫に
人の曳く小松に千代やさみすらむ
脇差の柄にふら〳〵若菜かな
垢爪や薺の前もはづかしき
　天神參
ちさい子の麻上下や梅のはな
梅の木や欲にや願はぬ三日の月
梅折るや盗みまするとと大聲に
梅の木のあるかほもせぬ山家かな
餅組も一さじきなりうめの花
鳥の音に咲かうともせず藪の梅

(一)新年に庭上に清き藁を敷くを福わらといふ

梅に月いやみからみはなかりけり
菰はげばはやあか〳〵と梅の花
　團十郎
咲いたりな江戸生えぬきの梅の花
梅折るや天窓のまるい影法師
　信濃言葉
赤いぞよあのものおれが梅の花
　相馬覽古
梅が香や平親王の御月夜
梅さくや唐土の鳥も來ぬ先に
月の梅酢の蒟蒻のとけふも過ぎぬ
笠きるやうめの咲く日を吉日と(一)
　山鶯よりもめづらしく新金
を齒にあてけるを
二歩判の初音出しけり梅の花
下戸村やしんかんとしてうめの花
紅梅やうつとしがれば二本まで
梅の花爰を盗めとさす月か
そら錠と人にはつげよ梅の花
　島原
入口のあいそになびく柳かな
皮剝が腰かけ柳青みけり
螢飛ぶ夕をあてやさし柳
門柳天窓でわけて這入りけり
人聲にもまれて青む柳かな
犬の子のふまへて眠る柳かな

(一)「酢の蒟蒻の」は何のかのといふ意の俗語

けろりくわんとして烏と柳かな

善光寺堂前

白猫のやうな柳も御花かな

御殿山

鶯も親子づとめや梅の花

三日月やふはりと梅に鶯が

鶯にあてがつておく垣根かな

鍬の柄に鶯なくや小梅むら

鶯の目利してなく我家かな

是程の上鶯を田舍かな

鶯のまてにまはるや組屋鋪

袖下はみな鶯や小ぜき越

松室に遊ぶ

鶯の馳走にはかぬ垣根かな

黄鳥や泥あしぬぐふ梅の花

鶯の野にしてなくや留守御殿

鶯やよくあきらめた籠の聲

閏正月

正月のふたつありとや浮寢鳥

老婆洗衣畫

彼の桃もながれ來よ〳〵春霞

輕井澤

笠でするさらば〳〵やうす霞

西山やおのれが乘るはどの霞

茶鳴子のやたらに鳴るや春がすみ

牡丹餅を喰はへて霞む烏かな

霞む日や夕山かげの飴の笛

霞む日やしんかんとして大座敷

横乘の馬のつゞくや夕霞

霞みけりにくい宿屋も迹の村

菜翁と遊ぶ

此門の霞むたそくや墨田の鶴

還暦の賀

老松やまたあらためていく霞

誰それとしれて霞むや門の原

けふも〳〵霞んで暮す小家かな

某母八十八歳賀

門畠や米の字なりの雪解水

雪解や門は雀の十五日

あさましやちよつとのがれに殘る雪

鍋の尻ほしならべたる雪解かな

雪解や鷺が三疋立臼に

世にあればむりに解すや門の雪

菴の雪下手な消樣したりけり

門前や杖でつくりし雪解川

三日月はそるぞ寒さは冴えかへる

藪入や三組一所に成田道

藪入や墓のまつ風うしろ吹く

芽出しから人さす草はなかりけり

はや淋し朝がほ蒔くといふ畑

藪入のわざと暮すや草の月

店開賀

福の來る門や野山の朝笑ひ
かくれ家や猫にもいたふ二日灸

初午

花の世を無官の狐鳴きにけり
齒も持たぬ口にくはへて接穗哉
夜に入れば直したくなるつぎほかな
山燒の明りに下る夜舟の火
畑打や子が這ひ歩行くつゝじ原
畑打や田鶴啼きわたるあたり迄

一年を賣て親を養ふは孝行

いはむかたなし

出代や汁の實なども蒔いて置く
出代やいづくもおなじ梅の花
出代の市にさらすや五十顔

二月十五日雪降りけるに

花のところへ雪のふる涅槃哉
御ねはんやとりわけ花の十五日
小うるさい花が咲くとて寢釋迦哉
寢ておはしても佛ぞよ花の降る
寢て起きて大欠(オホアクビ)して猫の戀
蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀
門番が明けてやりけり猫の戀
おどされて引返すなりうかれ猫
うかれ猫奇妙に焦げて戻りけり
戀猫のぬからぬかほで戻りけり
うかれ猫どのつらさげて又來たぞ

行きがけの駄賃になくや小田の雁
彼岸とて袖に這はする虱かな

板橋

かしましや江戸見た鴈の歸り樣
寢た跡の尻も結ばず歸る鴈

閏二月二十九日といふ日雨

も漸おこたりぬれば朝とく
頭陀帷首にかけて足ついで
例の角田堤にかゝる東はほ
のぼのとしらみたれど小藪
小家はいまだくらかりきし
かるに上のならせ給ふにや
川の面に天地丸赤々とうか
みて田中は新に道を作りみ
ぞ堀はことぐく板をわた
しておの〳〵御遊を待つと
見えたり誠に無心の草木に
いたるまで春風に伏しつゝ
めでたき御代をあふぐとぞ

覺え侍る

五百崎や御舟をがんで歸る雁

善光寺

開帳にあふや雀も親子連
雀子や川の中にて親を呼ぶ
雀の子そこのけ〳〵御馬が通る
竹にいざ梅にいざとや親すゞめ

我と來て遊べや親のない雀
雀子やお竹如來の流しもと
慈悲すれば糞をするなり雀の子(一)
雉子なくやきのふ燒れし千代の松
雉子なくや見かけた山のあるやうに(二)
夕雉子のはしり留りや鳰の海
黑門や下(シタ)に〳〵と雉子の聲
雀子のはや知りにけり隱れやう

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙かな
榎まで春めかせたり啼く蛙
親分と見えて上座に鳴く蛙
向き〳〵に蛙のいとこはとこかな
めでたさの煙聳えて啼く蛙
我を見て苦いかほする蛙かな
象潟や櫻をたべて鳴く蛙
玉川やまづ御先へと飛ぶかはづ
いうぜんとして山を見る蛙かな
其聲でひとつ踊れよ啼く蛙
產みさうな腹をかゝへて啼く蛙
我庵や蛙初手から老を啼く

南都

朝起の古風を捨てぬ乙鳥かな(三)
夕乙鳥我には翌日のあてもなし
晝めしをたべにおりたる雲雀哉
横乘の馬のつゞくや夕ひばり(四)

(一)「慈悲すれば糞をする」は諺
(二)「見かけた山」は見込みつきたる意の俗語
(三)諺に「奈良の朝起」といへり
(四)末五「夕霞」として前出

野大根も花となりけり鳴く雲雀
それ虻に世話をやかすな明り窓
神風や虻がをしへる山の道
小男鹿に手拭かさむ角の跡
小男鹿の落した角を枕かな
角おちて恥しげなり山の鹿

奉納

おんひら〳〵蝶も金比羅參りかな
蝶飛ぶや此世に望みないやうに
むつまじや生れ替らば野邊の蝶
大猫の尻尾でなぶる小蝶かな
蝶寢るや草ひきむしる尻の先
葎からあんな胡蝶の生れけり
田に畑にてん〳〵舞の小蝶かな
門の蝶子が這へば飛びはへばとぶ
小男鹿や蝶をふるつてまた眠る
氣の毒やおれをしたうて來る小蝶
てふといふ娘山路の案内し
けるに俄雨はら〳〵とふり
ければ
木の陰やてふとやどるも他生の縁

橋本町上人

陽炎や歩行ながらの御法談
かげろふや臼の中からま一筋
長閑さや垣間を覗く山の僧
陽炎や子をかくされし親の貌

長閑さや淺間けぶりの晝の月
陽炎や手に下駄はいて善光寺
凧あげてゆるりとしたる小村哉
美しき凧あがりけり乞食小屋
我蒔いた種をやれ〳〵けさの露
鎌倉やむかしどなたの千代椿
菜の花や霞の裾に少しづつ
陽炎やそばやが前の箸の山

小金原

呼びあうて長閑に暮らす野馬哉
かるた程門の菜の花咲きにけり
大菜小菜喰ふそばから花咲きぬ
春の日や暮れても見ゆる東山

三助がはつせ詣やはるの雨
傘さして箱根越すなり春の雨
朝市に大肌ぬぎや春の雨
掃留の赤元結やはるの雨(一)
餅買ひに箱提灯や春の雨
春雨に大欠する美人かな
袖たけの垣の嬉しやはるの雨
春雨や喰れ残りの鴨が啼く

春甫新宅賀

安堵して鼠も寢るよはるの雨

婚禮

春雨や相に相生の松の聲
春雨や鼠のなめる角田川

(一)掃留は掃溜に同じ

穴藏の中でものいふ春の雨
負弓の藪にかゝりてはるの雨

鳩いけんして曰

巣よつらくせ直せはるの雨(一)

水江春色

すつぽんも時や作らむはるの月
ついそこの二文渡しや春の月
待ち〳〵し日永となれど田舍かな
春風やとある垣根の赤草履
宿引に女も出たりはるの風
老いぬれば日の永いにも涙かな
闇がりの牛を曳出す日永かな
春風や牛にひかれて善光寺(三)
はるの風おまんが布の形にふく
狗が鼠とるなりはるの風(四)
不忍の池に龜どもの菓子を
ねだるありさまを見るに此
節娑婆に萬年の逗留もなら
む
永の日を喰ふや喰はずや池の龜
永き日や牛の涎の一里ほど
おらが世やそこらの草も餅になる
我宿は何にもないぞ巣立鳥
好々や此年よりをよぶことり
塊(ツイクル)もこゝろおくかよ巣立鳥(五)
手のひらにかざつて見るや市のひな

(一)「つらくせ」は不機嫌なる面癖
(二)諺を用ふ
(三)同上
(四)狗はえぬころ
(五)好々はすき〳〵と讀むべし

（一）觀音の詠歌といふに、「只たのめしめじが原のさしも草われ世の中にあちん限は」

上巳之部

浦風にお色の黒いひゝなかな
煤け雛しかも上座をめされけり
花咲きぬかた山かけに雛まつり
盃よまづ流るゝな三日の月
筆添へておもふ盃流しけり
川下や果は鬮どりの小盃
人まねに鳩も雀も汐干かな

如病得醫

花を折る拍子にとれししやくり哉
花のかけ南無さん火打なかりけり
かう活きて居るもふしぎぞ花の陰

三月十七日保科詣

花ちるやとある木陰も小開帳
人撰して一人なり花の陰
おとろへや花を折るにも口まげる
花の木に鷄寢るや淺草寺

觀音奉納

只たのめ花もはら〳〵あの通り
山の月花盗人を照らし給ふ
花のかげあかの他人はなかりけり
堪忍をいたしにゆくや花のかげ

刈萱堂

花の世は地藏ほさつも親子かな
花の木のもつて生れた果報かな

大和めぐりする人に旅の眞

言といふをさづけて
かならずよ跡見よそはか花の雲
今の世や猫も杓子も花見笠
ありやうは我も花より團子かな
（一）苦の娑婆や花が開けばひらく迚
さる人は病氣をつかふ花見かな

（一）「ありやう」は實際はの意

新吉原

行灯ではやしたてるや花の雲

御所にて

棒突が腮でをしへる櫻かな
櫻へと見えてじん〳〵ばしより哉
一本は櫻もちけり娑婆の役
此やうな末世を櫻だらけかな

人聲にほつとしたやら夕ざくら
氣に入つた櫻のかげもなかりけり
花守や夜は汝が八重ざくら
袖たけの初花櫻咲きにけり
山櫻皮を剝れて咲きにけり
傘にへたりと付きし櫻かな
天からでも降つたるやうに櫻かな
けふは町隣なる麻美と前の
日より約し置きけるにかれ
さはりありとて止みぬさは
とて翌の命待つものかはと
たゞひとり來たりしに幸懷
に五元集といふもののあれ

ばこれ究竟の句の相手なり

櫻々と唄はれし老木かな

一夜さに櫻はさゝらほさらかな(一)

下々に生れて夜もさくらかな

小坊主や親の供して山ざくら

鞦韆戯

ふらんとや櫻の花を持ちながら

櫻草といふ題をとりて

我國は草も櫻を咲きにけり

今すこしたしなくもがな菫草

百兩の石につりあふつゝじ哉

若草や北野參りの子供講

はるの日の入所なり藤の花

東西の花に散りたてられて

こゝろも山にうつりゆくと

いふ日は三月廿日なりけり

煤くさき笠も櫻の降る日かな

君が代の大めし喰うて櫻かな

根岸にて

山吹をさし出しさうな垣根かな

惣々にきげんとらるゝ蠶かな

そまつげに育てられたる蠶かな

やよしらみ這へ〳〵春の行く方へ

茶もつみぬ杉も作りぬ丘の家

舞々や翌日なきはるを笑ひ顔

ゆさ〳〵と春が行くぞよ野邊の草

(一)「さゝらほさらさら」はめちやくちや

陽炎の内からも立つ淺生かな

地獄

夕月や鍋の中にて啼く田にし

餓鬼

花散るや飲みたき水を遠霞

畜生

散る花に佛とも法とも知らぬかな

修羅

聲々に花の木陰のばくちかな

人間

咲く花の中にうごめく衆生かな

天上

霞む日やさぞ天人の御退屈

夏の部

下谷一番の顔してころもがへ
おもしろい夜は昔なり更衣
年とへば片手出す子や更衣
けふの日や替へてもやはり苫衣
立ちながら綿ふみぬいて出たりけり
　文虎が妻身まかりけるに
おりかけの縞目にかゝる初袷
　小兒の行末を祝して
たのもしやてんつるてんの初袷(一)
春日野の鹿に嗅がるゝ袷かな
南無あみだどてらの綿よひまやるぞ
人らしく替へもかへたり苫衣
　草菴
其門に天窓用心ころもがへ
ふだらくや赤い袷の小順禮
　大山詣(二)
四五間の木太刀をかつぐ袷かな
鶯のほゝと覗くや花御堂
永き日にかわく間もなし誕生佛
雀子もおなじく浴びる甘茶かな
馬の子が口さん出すや杜若
扇にて尺をとらせる牡丹かな
葉隠れの赤い李になく小犬
大江戸やおめずおくせず杜若

(一)「てんつるてん」は衣のゆきたけの短きこと
(二)大山神社に木太刀を奉納する習俗あり

朝顔にはげまされたる夏書かな
澁柿のしぶ〳〵花になりにけり
隱家や死なばすだれの青いうち
夕かげや駕の小脇の夏花持
是ほどの牡丹と仕かたする子かな
てもさても福相のぼたんかな
通路に階子わたすや杜若
　二十四年榮花只一夜夢
善盡し美を盡してもけしの花
桑の木は坊主にされてけしの花
けしさげて群集の中を通り鳧
卯の花の垣に名代のわらぢかな
卯の花や臼の目切と鶯と
我上へ今に咲くらむこけの花
かわくまで繩張る庭や若葉吹く
若葉してまたもにくまれ榎かな
門番のほまちのけしの咲きにけり
卯の花の吉日もちし後架かな
菴の苦花さくすべも知らぬ也
　禪寺
すみ〴〵も掃除とゞくや木下闇
法談の手まねも見えて夏木立
大寺は留守の體なり夏木立
筍の子に病のなきはなかりけり
首たけの水にもそよぐ穂麥かな
せい出してそよげ若竹今の内

若竹と呼ばるゝうちもすこしかな
あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに
鮓になる間と配るまぐろかな

老翁岩にこしかけて一軸を(一)
さづくる圖に

我汝を待つ事ひさし時鳥
是でこそ御時鳥松に月
這ひ渡る橋の下よりほとゝぎす
時鳥俗な菴とさみするな
ほとゝぎすなくや頭痛のぬけるほど
此雨にのつぴきならじ時鳥
せはしさを我にうつすな子規

鎭西八郎爲朝人礫うつ所に

時鳥蠅むしめらもよつく聞け(二)
卯の花もちそうに咲くか蜀魂
先住のつけわたりなり閑古鳥

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

高野山

地獄へは斯う參れとか閑古鳥
前の世のおれがいとこか閑古鳥
雲をはく口つきしたり蟇
目出たさは今年の蚊にも喰れけり
蚊の聲になれてすやゝ寢る子哉
宵越の豆腐明りに藪蚊かな
蚊柱の外に能なき榎かな

(一)黃石公と張良と會合の圖をいふ

(二)宗因の時鳥いかに鬼神も髓にきけに本づくが如し

蚊いぶしもなぐさみになる獨かな
我宿の後れ松魚も月夜かな
神國は天から藥ふりにけり
晝の蚊の來るや手をかへ品をかへ
我宿は口で吹いても出る蚊かな
隙人(ヒマジン)や蚊が出たゝとふれ歩行く
晝の蚊やだまりこくつて後(ウシロ)から
蚊柱の穴から見ゆる都かな
年寄と見てや鳴く蚊も耳のそば
芝浦やはつ鰹から夜のあける
鹿の親笹吹く風に戻りけり
五月雨の竹にはさまる在所かな
晝の蚊を後にかくす佛かな

鶯よ老をうつるな草の家
蜘の子はみなちりぢりの身すぎ哉
かはほりやさらば汝と兩國へ
まつて居る妻子もないか通し鴨
烟して蝙蝠の世もよかりけり
あやめめせ武門かやうに靜なり
古婆がかたにかけたり蛇の衣
羽蟻出る迄に目出たき柱かな
はげ天窓(タガ)籠をかけろと行々子
罷り出たるは此藪の蟇にてゐ
年寄の袖としらでや虎が雨
虎が雨などかろんじて濡れにけり

妙義山

五月雨や夜もかくれぬ山の穴

粒々皆辛苦

もたいなや晝寢してきく田植唄

信濃路や上の上にも田うゑ唄

身一つすごすとて女やもめ

の哀は

おのが里仕舞てどこへ田うゑ笠

住よし

唐人も見よや田植の笛太鼓

早乙女や箸にからまる草の花

稽古笛田はことぐく青みけり

寢せつけし子の洗濯や夏の月

夏山やひとりきげんの女郎花

なぐさみに藁を打つなり夏の月

小むしろや茶釜の中の夏の月

茨の花こゝをまたげと咲きにけり

短夜に竹の風くせ直りけり

起き〳〵に慾目引ぱる青田かな

豆腐やが來る晝顔が咲きにけり

夏の夜や二軒して見る草の花

源氏の題にて

夕がほや男結びの垣にさく

日々懈怠不惜寸陰

けふの日も棒ふり蟲よ翌日も又

ひいき鵜は又もからみて浮みけり

手枕や親子三人鵜のかせぎ

はなれ鵜が子の泣く舟に戻りけり

賑しう鐘の鳴込む鵜舟かな

鵜のまねを鵜より功者な子供かな

初螢ついとそれたる手風かな

もうひとつ川を越とよ飛ぶ螢

ゆけ螢とく〳〵人の呼ぶうちに

大螢ゆらり〳〵と通りけり

不忍池

螢火や呼ばらぬ龜は膳先へ

きれわらぢ螢とならば墨田川

夕月や大はだぬいでかたつぶり

我袖を親とたのむか逃げぼたる

里俗かたつむりをでいろと

いふ

此雨の降るにどつちへでいろかな

朝やけがよろこばしいか蝸牛

柴の戸や錠の替りにかたつぶり

かたつぶりそろ〳〵登れ不二の山

なか〳〵に安堵がほなり羽抜鳥

六月や月夜見かけて煤拂

小金原

母馬が番して呑ます清水かな

山里は馬にかけるも清水かな

人來たら蛙になれよ冷し瓜

初瓜を引とらまいて寢た子かな

三日月とひとつ並や冷し瓜

あさら井や小魚と遊ぶ心太
旅人や山にこしかけて心太

無限欲有限命

此風に不足いふなり夏ざしき
旅やせをめでたがるなり夏座敷
まつかげや扇でまねく千兩雨
手にとれば歩行きたくなる扇かな
西山や扇落しに行く月夜
夕暮の腮につょぱる扇かな
乙松や今年まつりの赤扇
小座頭の天窓へかぶる扇かな
他の人の見るも恥し夏ざしき

獨樂坊を訪ふに錠のかょり

ければ三界無安といふ事を

蠅よけの草をつるして扨どこへ
蟬鳴くや我家も石になるやうに
蟬鳴くや天にひつつく筑摩川
ねがはくば念佛をなけ夏の蟬
豐年の聲をあげけり門の蠅
蠅一つうてば南無あみだ佛かな
世がよくばも一つとまれ飯の蠅
侍に蠅を追はせる御馬かな
やれうつな蠅が手をする足をする
まょつ子や晝寢仕事に蚤拾ふ
蚤の跡かぞへながらに添乳かな
(一)蚤燒いて日和占ふ山家かな

(一)俗に蚤の音高ければ晴天なりといふ

草の葉や世の中よしと蠅さわぐ
山蟬のたもとの下を通りけり
松の蟬どこまで鳴て晝になる

新家賀

涼しさや糊のかわかぬ小行燈

春甫京へ行くを送る

涼しからむ這入口から加茂の水

兩國橋上

下見てもほう圖がないぞ涼舟
(一)涼しさや笠を帆にして賣賣舟

四條河原

涼風に月をも添へて二文かな
涼しさや彌陀成佛の此かたは

(一)「上を見ればほうづがない」の諺に據る
(二)かちくり人形をいふ

草雫今こしらへし涼風ぞ
藪村の貧乏なれて夕涼
魚どもが桶とも知らで夕涼
此月に涼みてのない夜なりけり

人形町

人形に茶をはこばせて涼み哉
(二)門涼人の朝がほ咲きにけり

銚子にて

朝涼や汁の實を釣る背戸の海
きのふは鮮魚に宴してけふ

は松宇佛

夜涼が笑ひ納めでありしよな
涼風やちから一ぱいきりぐす

すゞ風も隣の竹のあまりかな
拵へた露も涼しや門の月

江戸住人

錢なしは春草も見ず門すゞみ
おく信濃に浴して
下々も下々下々の下國の涼しさよ
身の上のかねとしりつゝ夕涼み

裏長屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて來りけり
丘の家や蓮に吹れて夕茶漬
萍の花よこい〳〵爺が茶や
むだ花にけしきとられて青瓢
團扇はつて先づそよがする萍かな

臼井峠にて

信濃路の山が荷になる暑かな
蕗の葉にぽんと穴あく暑かな

關宿舟中

暑き夜の荷と荷の間に寢たり鳧
米直段くつくとさがる暑かな
兎角してはした夕立ばかり也
あとからも又ござるぞよ小夕立
夕立や行燈直す小椽先
蟻の道雲の峯よりつゞきけり
湖水から出現したり雲の峰
投出した足の先なり雲の峯
川狩のうしろ明りやむら木立

川がりや地藏のひざの小脇差

玉川

萩もはや色なる浪や夕はらひ
麻(一)の葉に借錢書いて流しけり
形代をとく吹きふるせ萩すゝき
形代にさらば〳〵をする子かな
灯籠のやうな花咲く御祓かな

(一)後鳥羽院「玉川の岸の山吹影みえて色なる波に蛙鳴くなり」

一茶發句集 下

(一)「梶の花」は「梶の葉」の誤なるべし

秋の部

秋立つや隅の小隅の小松島

狗子有佛性

秋來ぬとしらぬ狗(エノコ)が佛かな

星さまのさゝやき給ふけしき哉

褌に笛つきさして星むかひ

聟星にいで披露せむ稲の花

哥書くや梶のかはりに糸瓜の葉

姫星の御顔をかくす榎かな

七日の夜只の星さへ見られけり

星待や龜も涼しいうしろつき

子寶が蚯蚓のたるぞ梶の花に(一)

病中

うつくしや障子の穴の天の川

木曾山へ流れ込みけり天の川

草鞋ながら墓參りして

息災で御目にかゝるぞ草の露

あの月は太郎がのだぞ迎鐘

末の子や御墓參りの箒持

迎火は草のはづれのはづれかな

亡妻新盆

かたみ子や母が來るとて手をたゝく

鼠尾草(ミツハギ)や水につければ風が吹く

玉棚や上座して鳴くきりぐ〜す

魂送

おれが場もとく賴むぞよ佛達
精靈の立ちぶる舞の月夜かな
山里やあゝのかうのと日延盆
べつたりと人のなる木や宮角力
草花を腮でなぶるや勝角力
板行にして賣られけり負相撲
椽ばなや二文花火も夜の體
稻妻やうつかりひよんとした顏へ
たのもしやまだ薄暑き三日の月
門の月暑がへれば人もへる

神前

秋草や草も角力とる男山

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古鄕山

病後

かな釘のやうな手足を秋の風
秋風に歩行いて逃るほたるかな

さと女三十五日

秋風やむしり殘りの赤い花
秋かぜの吹けとは植ゑぬ小松かな
秋風や壁のヘマムシヨ入道
墨染の蝶が飛ぶなり秋の風

正見寺の上人十ばかりなる

後住を殘して遷化ありし哀

さに

秋風やちひさい聲のあなかしこ
寢莚や野分を吹かす足のうら

五十足ては

露はらり〳〵大事の浮世かな
露置くや茶腹で越えるうつの山
露ちるや地獄の種をけふも蒔く
しら露に淨土參りのけいこかな
火ともして生おもしろや草の露
男女私にちぎりて夜ひそか
に逃行くを教訓して
人問はば露と答へよ合點か
愛子を失ひて
露の世は露の世ながら去ながら
露ちるやむさい此世に用なしと
秋霧や河原撫子見ゆるまで
霧に眠る目付きして居る蟇かな
あり明や淺間の露が膳を這ふ
寢がへりをするぞ脇よれきりぐ〜す
白露の玉ふんかくなきりぐ〜す
彌陀堂の土になる氣かきりぐ〜す
藪むらや灯籠の中にきりぐ〜す
きりぐ〜す聲が若いぞ〜に(一)

經堂

蟲の屁を指して笑ひ佛かな
放屁蟲爺が垣根としられけり

(一)末の「に」は「よ」の誤なるべし

寒いぞよ軒の蜩唐がらし
其分にならぬ〳〵と蟷螂哉
古犬や蚯蚓の唄に感じ貌
御祭りに赤い出立のとんぼかな

二百十日

世の中はよすぎにけらし草の露
狩好きの其身にかゝる夜露哉
御目出度存ゐ今朝の露

うどん花

甘い露ばせをさくとて降りしよな
夕やけやから紅に露しぐれ
朝顔や人の顔には、そつがある
蕣や一霜添てはつと咲く
朝顔の上からとるや經山寺
女郎花あつけらこんと立てりけり
鬼灯を膝の小猫にとられけり

萩寺

存じの外俗な茶屋あり萩の寺
耳に珠數掛けて折るなり草の花
何事のかぶり〳〵ぞをみなへし
女郎花一夜の風に衰ふる
入相の聞處なり草の花
散る芒寒くなるのが目にみゆる
穂芒やおれが小鬢もともそよぎ
きり〳〵しやんとして咲く桔梗かな
うか〳〵と出水に逢ひし木槿かな

むだ花に氣色とられし瓢かな
萩の末芒のもとや喰祭
江戸川や月待つ宵の芒ぶね
名月やまづはあなたも御安全
明月の御覽の通り屑家かな

病中

名月やとばかり立居むつかしき
明月のさつさと急ぎ給ふかな
明月を取つてくれろと泣く子かな
名月やあてにもせざる壁の穴

姥捨山

けふといふけふ名月の御側かな

赤馬關

名月や蟹も平をなのり出で

筑摩川舟留

名月やつい指先の名所山
やかましかりし老妻ことし
なく
小言いふ相手もあらば今日の月

姨捨などとは老足むつかし
く

有合の山ですますやけふの月

月蝕

人顔は月より先へ缺けにけり
むだ草も穂に穂が咲て三日の月
深川や蠣殼山の秋の月

(一)「とるや」は「みるや」の誤か
(二)「あつけらこん」は「あつけらかん」の誤なるべし

春耕孫祝

門の月殊に男松のいさみ聲

翌の夜の月を請合ふ爺かな

月も月そもく〳〵大の月夜かな

明く口へ月がさすなり隅田川

赤い月是は誰がのぢや子供達

秋の原知つたらなんぞ唄ふべき

秋日和とも思はない凡夫かな

なぐさみのはつちく〳〵や秋日和

母のなき子の這ひ習ふに

をさな子や笑ふにつけて秋の暮

立つな雁住めばどつこも秋の暮

病後

えいやつと活きた所があきの暮

蘆の穂を蟹がはさんで秋の暮

なか〳〵に人と生れて秋の暮

八月廿九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の舊友たれかれ八月廿八日詣るとしるしてありけるに今は三十年餘りの昔ならむおのれ彼地にとどまりて一つ鍋のもの喰ひて笑ひのゝしりむつまじき人達なりあはれきのふ參りたらむには面會してこしかた語りて心なぐさまむ

ものを互ひに四百餘里の道

程へだたりぬればふたゝび

此世には逢ひがたき齢にし

あればしきりにしたはしく

なつかしくなむ

近づきの樂書見えて秋の暮

茶店萬灯日ましにへりぬ

兩國の兩方ともに夜寒かな

うそ寒や親といふ字を知つてから

六十にふたつふみ込む夜寒哉

うそ寒をはや合點のとんぼかな

あばら骨なでじとすれど夜寒哉

寢筵や虱わすれて漸寒き

朝寒や垣の茶筅の影法師

うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づつ

若僧の扇面に

影法師に恥ぢよ夜寒のむだ歩行

旅

一人と帳面につく夜寒かな

膝がしら木會の夜寒に古びけり

行燈を畑に置いて碪かな

草藪も君が代を吹く小夜ぎぬた

雨の夜やつい隣なる小夜碪

梟が拍子とるなり小夜ぎぬた

飯けむり賑ひにけり夕ぎぬた

豐秋

二軒家や二軒餅つく秋の雨

外ヶ濱

今日からは日本の鴈ぞ樂に寢よ
初鴈の三羽も竿となりにけり
小組を呼びおろしけり小田の鴈
初鴈やあてにして來る庵の畠
初鴈や芒はまねく人は追ふ

旅にありて

鴈啼くやあはれ今年も片月見
初鴈もとまるや戀の輕井澤
白川や曲り直して天津鴈

信濃雪ふり

田の鴈や里の人數はけふも減る
おちつくと直に鳴きけり小田の鴈
天津鴈おれが松にはおりぬなり
朝夕や峯の小雀の門馴る
立つ鳴のいまにはじめぬ夕かな
普陀らくや蛇も御法の窩(アナ)に入る
蛇も入る穴はもつぞよ鈍太郎
足枕手枕鹿のむつまじや
山寺や椽の上なる鹿の聲
しぎ鳴くや深山の鹿も色好む
鹿鳴くや今二三町遠からば
やさしさや鹿も戀路を迷ふ山
人ありと見せる草履や田番小屋

米穀下直にて下々なんぎな

るべしとはこと國の人うら

やましからむ

日本の外ヶ濱まで落穂哉
旅人の垣根にはさむおち穂哉
今年米親といふ字を拜みけり
ことし米我等が小菜も青み鳧
姨捨はあれにゐとかどしかな
乳呑子の風除にたつかどし哉
人はいざ直なかどしもなかりけり
穂芒や細き心のさわがしき

爰に正風院此奥に百花あり

門にたつ菊や下戸なら通さじと
鍬の柄に子僧の名あり菊の花
大菊や今度長崎から抔と
酒臭き黄昏ごろや菊の花
勝つた菊大名小路通りけり
菊園や歩行きながらの小酒盛
まけ菊をひとり見直す夕かな

後の月

月の顔年は十三そこらかな(一)

名所紅葉

缺椀も同じ流れや立田川
掉鹿の水涕拭ふ紅葉かな
大寺の片戸さしけり夕紅葉

毒茸

(一)「お月さんいくつ十三七つ云々」の童謡による

人をとる茸はたして美しき
大茸馬糞も時を得たりけり
茸狩のから手で戻る騒かな

戸隱山

初梨の天から降つた社壇かな
柿の木であいと答へる小僧哉

小布施

拾はれぬ栗の見事よ大きさよ
柿の實や幾日ころげて麓迄
虱をひねりつぶさむことの
いたはしく又門に捨てゝ斷
食するも見るに忍ばざる
折から御佛の鬼の母にあて
がひたまふものをふと思ひ
出して
我味の柘榴へ這はす虱かな
老の身は今から寒さも苦に
なりて
山畠や蕎麥の白さもぞつとする
秋の夜や障子の穴の笛をふく
庵の夜や寢あまる罪は何貫目
木枯や諸勸化いれぬ小制札

九月盡

今日まではまめて鳴たよきりぐ〜す
行く秋を尾花がさらば〜かな

(一)鬼子母神が柘榴を好むは人肉の味に似たるよりなりとの俗說あり

冬の部

やあしばらく蟀だまれ初しぐれ

善光寺御堂庭乞食

重箱の錢四五文や夕しぐれ
牡丹餅の來べき空なり初時雨
(一)
雀踏む程は菜もありはつ時雨
初しぐれ夕飯買ひに出たりけり
時雨れねば夜も明けぬなり片山家
目ざす敵は鷄頭よはつ時雨
子を負うて川越す狙や一時雨
時雨るゝや親椀叩く啞乞食

旅

しぐるゝや家にしあらば初しぐれ
青柴や秤にかゝるはし時雨

桑名

蛤のつひの煙や夕しぐれ

途中にて素玩に逢ふ

しぐれ込め角から二軒目の庵
夜しぐれやから呼びされし按摩坊
人の爲しぐれておはす佛かな

悼

鳴く烏こんなしぐれのあらむとて

盜人おのが古鄕に隱れて縛
られしに

業の鳥罠を巡るやむら時雨

(一)吾背子が來べき宵なりの句を摸す

菜畑を通してくれる十夜哉
御十夜は巾着切も月夜かな
もろ〳〵の愚者も月夜の十夜哉
鳶ひよろひいよろ神の御立げな
我宿の貧乏神も御供せよ

桃青靈社

御寶前にかけ奉る初しぐれ
ばせを忌やことしもまめで旅虱
義仲寺へ急ぎはつしぐれ
ばせを忌や晝から錠の明く庵
ばせを忌に丸い天窓の披露かな
降る雨も小春なりけり知恩院
棒先の紙もひら〳〵小春かな
御取越餡で餅喰ふはなし哉

春日山

(一)『えひして』の誤
あるべし

棹鹿やえひしてなめる今朝の霜(一)
人足も霜がれ時や王子道
霞まで生きやうものか霜の鐘

中仙道

霜がれやおれを見掛けて鉦叩く

橋上乞食

母親を霜よけにして寢た子かな
小松菜の一文把や今朝の霜

追分

霜がれや鍋の墨かく小傾城
霜がれや新吉原も小藪並

一人旅

次の間の灯で膳につく寒さかな
一文に一つ鉦打つ寒さかな
寒さにもなれて歩行くや信濃山
年がさをうらやまれたる寒さかな
上野の麓に蝸牛のから家か
りて露の間の夢の結び所と
すきのふあたり住倦たる人
のなせる業にや垣の蕣のそ
れなりに枯れて其實はほろ
ほろ落ちたりいく人の泪を
かけし果ともおもはれて秋
に立增りて哀れなり又門口
に二尺計なる土をならして
菜のやうなるもの蒔き置き
けるが雪の片隅にほや〳〵
と青みぬ是必ず愛度春を迎
へて餅いはふべき旦の料な
らむか壁は七福卽生の守り
張重ねて盗人の輩を防ぎ竈
は大根注連といふものを引
きはへて回祿を逃れむとす
荒神松はいまだ野の色なが
ら横ざまにこけたり皆たゞ
行末いつ迄か住果むあらま
しぞと見ゆるも今は雲にや

迹をくらましけむ山にや影
をかくしけむすべていづこ
かつひの栖ならむかくいふ
我もしばしが程に又人にか
くいはれむ事をおもふのみ
身に添ふや前の主の寒さ迄
おのが姿にいふ
ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉

文化六年十二月十五日賀舊

家大川氏

木枯や千代に八千代の門榎
今日も〳〵只木枯の菜屑かな
木枯や雀も口につかはるゝ
木枯や行拔け路次の上總山
水仙や大仕合のきりぐす
水仙や垣に結ひこむ筑波山
嵯峨村と名乘り顏なり枇杷の花
落葉して日向に醉ひし小僧かな
楢の葉の朝から散るや豆腐桶
掛がねのさても淋しや散る木の葉
落葉して三月頃の垣根かな
鶯の口すぎに來る落葉かな
門畑や猫をぢらして飛ぶ木の葉

花鋤委地無人收

おもひ草思はぬ草も枯れにけり
枯芒昔婆鬼あつたとさ

作らるゝ菊から先へ枯れにけり
女郎花なんの因果で枯れかねる
木瓜の株苅りつくされて歸花
大根引大根で道を教へけり
野大根引きすてられもせざりけり
鶴遊べ葛飾大根今やひく
雉子なども粗鳴きにけり大根引
尼寺や二人(フタリ)かゝつて大根引
鳴く雀其大根も今引くぞ
爐開やあつらへ通り夜の雨
炭竈の空の小隅も浮世哉
朝晴にぱち〳〵炭の機嫌かな
炭の火や齡のへるもあの通り
分けてやる隣もあれなおこり炭
炭の火に峰の松風通ひけり
炭の火に月落ち烏啼きにけり
榾の火にうしろ向けけり最明寺
榾の火や目出度御代の顏と顏

樫木原に泊りて

埋火に桂の鷗聞えけり

旅

斯う寢るも我火燵では無かりけり

嵯峨山

はや〳〵と誰冬ごもる細けぶり

飯菴

留主札もそれなりにして冬籠

(一)雨の漏るが虎狼よりも恐しといふ昔話による

(二)「果報は寝て待て」の諺による

小人閑居成不善

冬籠悪もの喰のつのりけり
さし捨てし柳の陰をふゆ籠
冬籠その夜に聞くや山の雨
眠りやう鷺に習はむ冬ごもり
西の木と聞てたのむや冬籠
ばせを塚先づ拜むなり初紙子
ほか來てもどなたぞよいふ紙子哉
加茂の水吉野紙子とほたへけり

大坂八軒家

船が着てゐとはぐふとんかな
祐成がふとん引きはぐ笑ひかな
今少し鴈を聞くとて蒲團かな
漏(モリ)どのか恐しといふふすま哉(一)
燒穴の日に〳〵ふえる紙衣かな
三日月と肩をならべて網代守
網代守天窓で楫を取りにけり
さきつとしの大なるに鳥海
山はくづれて海を埋め甘滿
寺はゆりこみ沼田とかはり
ぬさすがの名どころも事ごとにうらむが如くなりけり
象潟の缺を摑んで鳴く千鳥
御地藏と日向ぼこして鳴く千鳥
おちつきにちつと寢て見る小鴨哉
汝等も福は待つかよ浮寢鳥(二)

(一)諺を用ふ

(二)盛任は遠藤武者所盛遠の事なるべし

(三)「居佛よりも立佛」「立つて居る者は親でも使へ」などの諺を用ふ

鶯や黄色な聲で親を呼ぶ
鷦鷯(ミソサヽイ)ちゝというても日が暮れる
こつそりとしてかせぐ也みそさゝい
皸(アカヾリ)をかくして母の夜伽かな
門口へ來て氷るなり三井の鐘
一さんに飛んで火に入る霰かな(一)
盛任がしやつ面たゝくあられ哉(二)
初雪や俵の上の小行燈
はつ雪や今行く里の見えて降る
初雪やこきつかはるゝ立佛(三)
初ゆきや椽から落ちし上草履
はつ雪や古郷見ゆる壁の穴
初ゆきや鳥も構はぬ女郎花

石の上の住居のこゝろせはしさよ

雪散るやきのふは見えぬ借家札
來る人が道つけるなり門の雪
ちとたらぬ僕や隣の雪もはく
うまさうな雪がふうはり〳〵と
ほちや〳〵と雪にくるまる在所哉
犬どもがよけてくれけり雪の道
雪ちるや脇から見たら榮耀駕

十二月廿四日古郷に入る

是がまあ終の栖か雪五尺

一茶病中のていたらく

衽(オクビ)なりに吹込む雪や枕もと

雪舟引や屋根から呼ばる屈狀
棧や凡人わざに雪舟を引く
翌は又どこの月夜の里神樂
里並に藪の鍛冶屋も祭かな
行く人を皿で招くや藥喰
五十にて鰒の味をしる夜かな
鰒汁やもやひ世帶の總鼾
とら鰒の顏をつん出す葉蔭かな
出始を祝うてたゝく瓢かな
大寒や八月ほしきまつの月
一夜さは出來心なり寒念佛
寒念佛さては貴殿で有りしよな
寒垢離の背中に龍の披露哉

叱らるゝ人うらやまし年の暮
梟よのほゝん所かとしの暮
ともかくもあなた任せの年の暮(一)
節季候や七尺去つて小節季候(二)
町中をよい年をして節季候
夕月や御煤の過ぎし善光寺

念々相續

彌陀佛のみやけに年を拾ふかな

節分

福豆やふく梅干や齒にあはぬ
隱れ家や齒のない聲で福は內
餅花の木蔭にてうちあはゝ哉
神の灯や餅を定木に餅をきる

(一)あなたは佛をさす
(二)「弟子七尺去つて師の影を踏まず」の諺

我門へ來さうにしたり配り餅
わんといへさあいへ犬も年忘れ
いくつやら覺えぬ上に年わすれ

長崎

君が代やから人も來て年籠

雜

おのづから頭が下るなる神路山
掃溜へ鶴の下りけり和歌の浦(一)
月花や四十九年のむだ歩行
鶴の子の千代も一日なくなりぬ
佛ともならでうかゝ老の松

牧人七十賀

きゝ給へ竹の雀もちよゝと

琵琶湖

龜殿のいくつの年ぞ不二の山

天下泰平

松蔭に寢て喰ふ六十餘州かな

(一)諺を用ふ

朝菜つみ夕菜つみつゝつむとしの
つむりの雪ぞ野らにまがへる
世の中はかくてもへけれぬるてふの
夢見てばかり身をすぐす哉
かつしかの栖立退く日さし
木の芽吹きたるに
古庵にのち住む人よ花さかば
心さし木の櫻とをしれ
いさましの老木ざくらや翌の日に
倒るゝ迄も花は咲きぬる
うつ波に千度しづみて浮草の
うき世並とて花や咲くらむ
夕立のまだ晴れやらぬ木の間より
雫ながらに出づる月かな

功成身退といふ事を

里々を涼しくなして夕立の
光しりぞく山の外かな
七夕の人見給はゞむさし野の
草葉のむしとおほしめすらむ

念彼觀音力

稲の穂よ南無稲の穂よ〳〵
かゝるみのりの秋はあらじな
行く雲の跡からはげる青空へ
うそを月夜のむら時雨哉
木曾おろし雲吹き盡す青空の
はづれにけぶる淺間山かな

こちあちの風のまに〳〵吹げばとぶ
塵の身にさへせはしなの世や
いくばくのなげきこりつむ小車の
下り坂なる我齢かな

みちのくへたつとて

ながらへば歸らむ事もしら川の
關を越え行く老の身なれば
追風にうしろ任せてあみだ笠
おのづと西へ吹れゆくなり
つひの世の煙の種となら柴の
まがらぬ杖をたれのこしつゝ
手をそらし〳〵つゝ活ばなの
花の身ぶりを仕るかな
時鳥さのみな鳴きそ作るべき
田はさら〳〵に持たぬ庵ぞ

あがりたる世の言の葉を見るに、すなほなる巧なる俳諧なる、さまゞなれど、いづれも海山花鳥のあはれをつくして、その物のまことを失へるは一つもあることなし。たまゝそのまことにたがへるありと見ゆるは、なかゝに思はずなるなさけをこめたるものにて、いとめでたし。くだれる世にいたりては、大かた人の心うすくなりゆき、まことのすぢを深くもたどらねば、おのづから淺はかになりて、いにしへには似べくもあらずなむなりにたる。今し世に行はるゝ俳諧の發句といふも、またかくの如くなるべし。一茶翁はそのふるまひも發句も、うまくいにしへの俳諧の心を得し人なることは言ふもさらなり。その集あまたなりしが、今は世にちりほひて、たはやすく得べくもあらずなれるを、書林向榮堂嗽芳菴墨芳と、こゝにあなぐりかしこに求めて、かく一部の集となしぬるは、たれかはめで喜ばずしもあらむ。

天保十四年みなつき

すみだ川のつながぬ舟にて　櫻園主人

今井彦右衛門輯
嘉永元戊申歳新鐫
十軒店
江戸書林　英大助
通貳丁目
山城屋佐兵衛
善光寺大門町
信州書林　蔦屋伴五郎

俳諧玉藻集

序

花の都の花にも月にも、なれにし風流人のいにしへの、名ある女のうつくしき句をあつめて、玉藻集となづけ、櫻木にちりばめむとなり。されば我にこのはし書せよと勸にいなみがたくて、三とせのやまうの枕をあげ、かの何むしの這ふごとくといへる、恥かしみふかきながら、筆を染めぬる頃は、やよひのはじめなりけらし。

千代尼

俳諧玉藻集

平安　夜半亭蕪村輯

春之部

杠葉の茎も紅さすあしたかな　伊勢園女

元日や掃かぬ嘉例も松の塵　松葉妻

新しう子を思はばや花の春　丹野母

松作御恵や代々の春しけ

佛より神ぞ尊き今朝の春とめ

去年の眉今朝は嬉しき霞哉　越前簪

いざ摘まむ若菜洩すな籠の内　柏原すて

今朝見れば若菜に揃ふ地黒好　江戸秋色

壬申の八月、神風やいせの古郷を立て、古き都のこゝに來りぬ、その年もあら玉の春を迎へて

難波女や何からとはむ事始　園女

日參茶屋

長生に徳あり姥がすわり餅　同

春風春水一時來

新しう揃へかけばや荒筵　遊女利生

色紙や色好みの家に筆始　越前愛女

ぶり〳〵を我は左に見ゆる哉　大津智月

鶯や手元休めむ流しもと　同

鶯に晝笑はるゝ帽子かな　同

雀して見れば竹にも鶯菜　紅糸
鶯や衣張續く枝つゞき　某女
はご板を子にかこつけて囉ひ鳧　乃龍妻
笄の中や住みよき隱れ羽子　新女
梅が香や宵の別れの一つまへ　てん

（一）「さくさめ」は姑

こゝろむつかしき折から人
のもとへ送り侍る

初梅や文書く事を思ひたち　肥前紫
盃やおさへて走る梅の花　梅園
梅を折る隣も淺き釣瓶かな　女
始ての梅にしらすな東風の風　智月娘錦江
日に梅ょ思はず戀の筆始　そめ
氣の張らぬ入相聞て梅見哉　園女

（二）雪汁は雪のしゞく

苔なる梅溫むる春日かな　智月
寄古今梅

さくさめの何に色こき梅の注連　園女
（一）
壬午の年菅神御忌にあたり
給ふに古き神書を奉るとて
梅年をおよそ八百何十年　同
貫之の梅に

梅が香や慮外ながらも旅勞　同
美しい處がほしい梅の花　三州牛久保少女きち
吹て來た又紅梅にあたらうか　紅糸
手を伸て折りゆく春の木草哉　園女
春めきて人の心はうかふ〳〵　木曾塚女つや
雪汁のぬくみ急げよ苔の花　智月
（二）

春の野に心ある人の素顔哉　園女
蕗の臺峯には雪のまだ高し　梅曉女

（一）此句は其角のなり

伊奈木川

手くり舟風は柳に委せたり　園女
青柳も宗祇の髭の匂ひかな　同尼
風ながら衣に染めたき柳哉　芳樹
大木に思へばならぬ柳かな　と、め
霜の鶴土に蒲團も被されず
（一）
と子をかなしみし人もとも
に流水むなし

親も子も同じ蒲團や別霜　秋色
初夜後夜の鐘つきやみし別霜　老尼松吟
いそがしや菫を摘めば土筆　園女
右左知れぬ蕨の手先哉　伊勢つ
東雲をこらへかねたる雲雀哉　同みち
白雲を瀧へ蹴落す雲雀かな　膳所萬里
我のせて廓を出でよ凧　遊女たま
菫摘む袖に飛びつく蛙かな　ふぢ
雉の尾のやさしくさはる菫哉　秋色

鏡石

雉の鳴く鏡のおくや天の原　園女
染めたらで山までそめる菫哉　同

明野

咲かぬ間も物にまぎれぬ菫哉　同
大和見にまかりさぶらふと
て

燕にしばし預ける舍かな　園女
かくいへる我も別を惜みて　形池
契りおく燕と遊ばむ庭の猫　同
猫ぬすまれて
猫の妻いかなる君の奪ひ行く　嵐雪妻
思ふ事伏籠にかけて朧月　遊女のざと
其角をいたむ
明日田鶴の翌(アス)も春なし袖の月　籠口
男なら一夜寢て見む春の山　近江とよ
二見
春日照る二見は誰の歌姿　とめ
くり臺に芹匂はする女哉　簪
春雨のあがるや軒に鳴く雀　羽紅
陽炎やおのが翅を池の水　園女
蜆とり早苗に習ふ心かな　秋色
菜の花や引殘されて種大根　豐後りん
蝶々は花に離れぬあひだ哉　すて
物や思ふいはでも花に蝶黃也　ふぢ
樂みよ胡蝶も花の一勢　右貞女
明方につれてや花の鳥あつめ　田上尼
是でこそ命をしけれ山櫻　智月
入相の鐘に痩るか山櫻　同
山ざくら散るや小川の水車　同
是を見てあそこへ行かむ山櫻　りん
花ちりぬ是を名づけて姥櫻　尙白母

欄干に夜ちる花の立ち姿　羽紅
其角をいたむ
土の黃な蝶に手向や花の露　笹分
同
其人の夢路も花の明りかな　辰下
花にあかぬ浮世男の憎さかな　去來妹千子
伊賀越
松山の間々や花の雲　園女
いその宮
鳥の聲花ある方へ四方拜　同
宮川をわたりまだ夜深し
色あひも僅に春の夜明かな　同
御材引
講親の旅籠の馬や花かづら　同
芭蕉翁訪れし時、のうれんの奥ものゆかし梅の花とありし返し
時雨れてや花まで殘る檜笠　同
花の前に顏はづかしや旅衣　同
角びしの猿の酒でも花心　同
蒲團まで朝の寒さや花の雪　同
舍たつとて
眠たがる人になる見えそ朝櫻　同
追々に來る人ごとの櫻かな　同
尾部山
三絃の拍子にかゝる櫻哉　同

奉納

櫻とは見しりながらや神路山　とめ
そも我は鐘に用なき櫻かな　秋色
花の色は乳母に離れよ櫻町　同

思夜櫻

夜櫻や太閤さまの櫻狩　園女
散つたとの狀は屆きつ櫻狩　同
君が代の日傘に成りし櫻哉　辰下
我年のよるとはしらず花盛　智月
兄弟はたんだ諍(イサカ)へ花にこそ　同
花咲て近江の舟の機嫌かひ　同
逢坂や花の梢の車道　同
友憎くや翌(少女)というたが花の雨　(みね)

こしらへて出れば程なく櫻哉　作州たど女
短尺や兒の手とどく花の枝　京みつ
此花に垣も結ひたし此道に　京文字けん
一つ木のすれ散る花の浮世哉　しけ
花に來て美しくなる心哉　たつ
女とていかに侮る花の風　簪
刈捨てし柴に花さく雨中哉　同
落花せむ耳も驚く風の音　すて
花よりも氣に當りぬる嵐哉　同

尼になりて太秦に住みける

時

花をやる櫻や夢の浮世もの　同
花は世の例(タメシ)に咲くや一盛　同

(一)牡丹花は肯柏

牡丹花は實に香を愛し給へ(一)りし也、酒も香あり花も香あり、さればこそ夢といふ菴にはふして、金角の牛には乘り給ひける也、かゝる風流の身より出來れば其ことはいはむもさらにや、猶あやしきは此翁の和泉の堺を、今や主はおかぬか、主はおかぬかといひもて過させしを、おき申さむと呼入れし人ありければ、それよりそこに住み給ふことはありと也、いふは風流よぶも風流、いまむきの題にて誹諧の發句す、にげなくはゞかりありや

笠の圖にとれや氣にあふ春の道　園女

孫を愛して

麥藁の家してやらむ雨蛙　智月
溜池に蛙生るゝぬるみかな　同
其後はことに粟津の田螺哉　秋色
出代や此方(コナタ)の雨もけふばかり　りん
出代も頭巾で行くや花の頃　園女
笋も櫛も昔やちり椿　羽紅
沖にけふ足跡つくる汐干哉　吉次母桃女

(一)原本「唐士」とあるは土の誤

(二)婢子は「はうこ」とよむ、人形のこと

(三)「女はをして」は「女もして」の誤か

桃の節句を

柳まけ去年の男のとつた髪　遊女唐士(一)

馳走する身も我なれや雛の客　梅・

桃柳代りありくや女の子　羽紅

桃見せて泣かず尿せず婢子哉(二)　智月

上巳

雛立てゝ局になるや娘の子　りん

幾年(イクトセ)も變らぬものや雛の髪　松吟

なぶらるゝ子持ながらや雛遊　朱芳妻

相思子

相思ふ酢貝や祝ふ雛遊　幸女

山つゝじ海に見よとや夕日影　智月

山吹の色にはあらぬ馴染哉　いく

寄拾遺款冬

山吹にいしう射たりや雀弓　園女

六田渡

山吹に川よりあがる雫哉　同

をとこもすなるやまとしまねの月を、女はをして見む(三)とするを、あざける人もあべけれど、いさしらずといはむもいかゞ侍らむ、いときなき時やり初しこきのこの、ひいふ三つ四つ六玉川の水のもとすゑもわいだめなくして、いく瀬のわたりをなむたどりしか、さればよとちうせい駒のくつわづ(一)らをひかへて、いさゝかの所の水かひてむとて、見ずもあらず見もせぬ所々を、筆の鞭打ちはいといふ俳諧の句に、やをら荷ひ出し、山吹よと呼びかけて、わたさぬ川をさはあらじかし、とまれかくまれすなるみちは、いなびてもいなとは人のいはせまじものをと、百丸子といへる好もののをのこのもとになむまゐらせぬ

(一)「ちうせい」は小き

山吹に馬乗出して六玉川　卯七園女

山吹やゆらぐ筧のこぼれ水　去來妻春子

ゆく春のうしろ姿歟藤の花　かな女

小鹽井

大炊の目出たき貌や藤の花　園女

藤や只君にふれたる結ほほれ　同

ぬれ筒も藤沈みたる暮の色　同

大和路の望の春も暮れにけり　智月

夏之部

四月朔日當麻寺にて

更衣みづから織らぬ罪深し　園女

同じ日香久山にまかりて

あら美し卯の花は誰更衣　同

はや膝に酒こぼしけり更衣　同

風流やうらに繪をかく更衣　大坂久女

戀ひ死なば我塚でなけ郭公　遊女奥州

眞愚上人にわかるゝ

さつぱりと衣たゝかれ更衣　智月

何をあてに行くやら闇の時鳥　りん

時鳥風鈴はづして待つ夜哉　尙白母

入相の響の中やほとゝぎす　羽紅

男なら追はへても哉時鳥　鷗伯妻

なけや〳〵今はいつなむ時の鳥　越前眞久妻

居るやうなり木の下闇の時鳥　同

裏を着て寢よとの鐘か子規　秋色

山里を出ぬやまじめな郭公　宮川政田妹

遲く來るやおくてといはむ田長鳥　同

たゞ有明の月ぞのこれると

吟ぜられしに

歌がるた憎き人哉ほとゝぎす　智月

晝まではさのみ急がず子規　智月

妻にせよ蟻に聲なし時鳥　ふぢ

啼くにさへ笑はゞいかに郭公　みつ

卯の花や投げやりさまを細心　園女

卯の花や品も變らぬけふの花　同

富士の根に鰹あがらで道者哉　膳所萬里

短夜を長いは夢の思ひ哉　遊女好吟

爪はづれ華奢に育つや若楓

產衣に夜の目もあはぬ若葉哉　りん

猿澤にて

水若葉被着て來し人の影　園女

情なうに見えて位のある白牡丹　久女

白牡丹子は幾人も持ちけれど　智月

脇差は落しざしなり牡丹見に　祇園下河原常女

ぬれつけて色は變らじ杜若　遊女かぢ

杜若いつ見むことぞ澤ながら　奥州

柏の香に蚣氣づかふ蚊遣哉　何某母

筆の鞘燒て待つ夜の蚊遣哉　尼芳樹

獨寢や夜わたる男蚊の聲侘し　智月

御乳の人添寢ややさし枕蚊帳　千春妻

男なき寢覺はこはい蚊帳哉　遊女綾戸

手枕や月の布目の蚊帳の中　園女

蚊帳やごしに虹見る朝の涼かな　千雀妻

筍や皮つきこはし甲武者　遊女智月

石竹や誰花こまを捨てたらむ　豐後かう

白鷺の人音聞くや麥の中　慎女

あの中へ轉びて見たき青田哉　たつ

手鞠なら散るとも上れ飛上れ　智月

雨滴に袖もあやめの匂ひかな　秋色

祭近し入帆につゞく幟かな　園女
今朝見れば猫の踏折る菖蒲哉　少女花鈴
夏菊や薬とならむ床の上　智月

多田院にて

金にて鑄つべき顔や合歡の花　園女
朝顔にきほひぬかした螢哉　備中松山錦屑

三熊野へ詣ける時

螢火や爰恐しき八鬼尾谷　田上尼

辭世

もえ易く又消え易き螢哉　去來妹千子
螢火を畫はいづくに池の水　伊勢みつ
寢所へ扇にするゑし螢かな　園女
山深みそれに名たてぞ姫胡桃　同
交りを紫蘇の染たる小梅哉　秋色
水底の影をこはがる螢哉　眞久妻
是で見る月さへ涼し武藏野は　紅糸
川中にとどして見たし夏の月　園女
月影に動く夏木や葉の光　去來妻
夕立やいとしい時と憎い時　遊女しづか
夕立や僅に降て田の黑み　肥前紫白
白雨に呼出さるゝ柏かな　園女
五月雨盛りいちごの雫かな　徹士妻留里
縫物や着もせで汚す五月雨　羽紅
五月雨や人伺公して鴆（カイツブリ）　秋色
けし垣の内や硯の小町形　萬里
けし咲くや雛の小袖の蟲拂ひ　かな

けし殘れ菊の太夫が庵の跡　江戸素顰
有（アル）となきと二本さしけり芥子の花　智月
なぐられてこぼるゝけしや日の移　同

素牛を宿して

進出て瓜むく客の國咄し　園女
試みむと瓜に眉かく端居哉　同

始めて召されたる御方にて

見ぬ方の御園の瓜の汗ふかむ　秋色
涼しさや髪結直す朝きげん　りん
くらべあふ股の太さや庭涼み　越後三條辰下
涼しさを持ちあふ風の便かな　はつ
涼風や余所の鉦鼓になむあみだ　園女
駕かきの待たする森の涼哉　梅
簾さげて誰が妻ならむ涼舟　秋色
崎風はすぐれて涼し五位の聲　智月
涼しさや夏田の畔の畫あかり　同
琴彈て老を嚙せよ夕涼　同
どう見ても何やら足らぬ底清水　秋色

氷花子餞別

石に針生姜も入れず清水哉　同
たそがれの物とや團扇一重帶　なか

靜掃風軒散髮眼

卷々の中に吹かるゝ團扇哉　園女
香附子のたけ見渡して暑哉　紫白
負うた子に髮なぶらるゝ暑哉　園女

氷花子餞別

歌か尾も馬上の吟の暑かな　園女
夕顔によばれてつらき暑哉　羽紅
夕顔やさすがとひ人も器量程　智月

すみよしにて

けふ來ても何の傳授か夏神樂　園女
子供等にいざ京見せう祇園會　紫塵母
蟲干や具足櫃から轉び出る　遊女小源

其角をいたむ

日々に諸手合せて百合の花　秋色
晝貌や雨降りたらぬ花の顔　智月
蟬の羽の輕きうつりや竹の皮　園女
逢坂やいとゞせきあふ蟬の聲　智月

母の墓にて

我影のそれかと覗く落葉哉　同

我子をいたむ

佛もこもりて蓮の蒼かな　りん
佛めきて心おかるゝ蓮かな　越前秋色
蓮池や向ふの社暮深し　かめ

朝熊

乙女子が辷りて落ちよ雲の峰　園女

秋之部

來る秋のきりぎは見すゑ一葉哉　柏原すて
桐の葉に隱れて匂ふ茗荷哉　伊賀てう
蜘の巣のたるみ初めけり秋の風　素鞱
大内のかざり拜まむ星祭　去來妹千子
七夕の忍びながらも光哉　松吟
かけ針や舟引きとめむ天の川　綾戸
木綿鬘星合の濱にかけてあり　春女
思へたゞ硯洗ひの後の恥　園女
見るもうし獨住居の魂祭　湖隣女
施餓鬼棚やあるは泪の古位牌　橋水母性桂
魂祭種殘されし角小豆哉　つかめ
朝夕に見る子見たがる踊哉　りん
兀山に秋のとりつく山もなし　園女
朝顔やのいたる人も懷かしく　遊女花崎
蕣の咲くや親にも呵られず　智月
蕣の花を見たさの丸寢哉　卯七妻亀女
朝顔のはえあふ紅粉のれまき哉　春子
萩に來て筑摩の人か五本松　遊女秋色
猪も抱れて萩のひと夜哉　高尾
朝露のうちにと萩の使かな　園女
風にかくせ小萩が露の置所　湖隣女
おく露は玉のやうなる小萩哉　柏原行方妻すて
はれしより氣づくしや露の玉葛　千子
柴草の露もちかぬるそだち哉

船梁の露はもろ寢の涙哉　秋色
初露に風さへしめる扇かな　同
垣越に誰殿やらむふぢ袴　直久妻
芭蕉葉の破れつゞらむ松の針　萬里
粟の穂の實は數ならぬ女郎花　すて
身を恥(ハヂ)よくねるとあれば女郎花　秋色
一羽飛ぶ雁に哀の寢覺かな　少女花鈴

兄去來に供していせへ詣け
る道すがら、初旅の心を

伊勢迄のよき道連よ今朝の雁　千子
箱王が指す雁や暮の鐘　秋色
名月や琴柱にさはる栗の皮　園女

寄芭蕉雨

名月や雨に開いて文字なき葉　同
神垣や御百度うつてけふの月　同
名月や筆の言葉の引廻し　同

雨後曉天晴

得た貝を吹て田蓑の月見哉　同
月や空にゐよげに見ゆる簾越　すて
夜明には露まで月の別れ哉　同
葎にもゐみて見ゆるや今日の月　たつ
天の戸のすかし物かよ三日の月　みつ
名月や浴衣引きさく薄原　うめ
名月や青うさし入る幟の中　せん
盃を取り落しけり今日の月　鼠丸女
我年に今宵十五夜の月見哉　池浦知仲妹つね
十五才

月はのう淋しいでこそ哀なる　京遊女九重
ても遊べ雲が盗んでけふの月　辰下
桂男の懷にも入るや閨の月　八千代
けふの月婆とはよばぬ小町哉　秋色
楊貴妃の睦言もなしけふの月　同
月みつと和泉式部も恨かな　同
名月や志賀の磯田の榎いろ　智月
二つ有ば諍(アラ)ひやせむ今日の月　同
川上で菜を洗うたぞ月の影　同
天水にたまる月影ま一盃　同
おろ〳〵と向へば月の御光哉　同
名月に鴉は聲を呑れけり　同
立待や痺(シビレ)直さむ白の上　同

居待月起て守らむ枕撓　同
寢待月舟も靜に行き次第　同
月見れば父の礎に鬧し　羽紅
御所、方も夜寒につゞく砧哉　作州ヲエふち
腹の立つ時や砧の片拍子　たゞめ

海邊薄

むら薄輪にはる風や帆の餘り　園女
はづれ〳〵粟にも似ざる薄哉　同
迷子の親の心やすゞき原　同
秋の野を舞臺に見たる薄哉　萬里

秋の千種の哀れなるが中に

櫛さすに力なきこそ薄なれ　遊女長門
花野まで出て染めたるか立田姫　蚊市妻のさ

（一）ぢうこつこは輕忽

横乘に花野ぞゆるす牛の鞭　萬里

法隆寺

二王にも寄添ふ葛のしげり哉　園女

風の名の付て吹きよる新酒哉　同

縫物につかみ添へけり蟋蟀　紫青

古郷に哀なものよきりぐ〜す　正脂娘七

定まらぬ朝の曇やきりぐ〜す　うめ

年よれば聲はかるゝぞ蟋蟀　智月

ぎぼうしの傍に經よむ蜂（イトド）哉　かな

小萩の露のいたはりもむつ

まじく聞えける、吳猛といひし人の昔に思ひあはせて

秋の蚊やしかも拂はで老の伽　秋色

けうこつに誰が觸（サハ）るぞ鵙の聲　たつ（一）

梅が枝にこそ鶯は巣をくへ

鵙の子を育てあぐるや茨くろ　素檗

粟蒔の跡踏みつけに村雀　かな

嵐蘭子を悼む

鳴出して米こぼしけり稲雀　智月

淋しさを我物顔や秋の鳩　智月

沙汰なしに渡てゐるか四十雀　田上尼

やどり木に蜻蛉も通へ捨階子　辰下

小原女や野分に向ふ抱帶（カヘオビ）　園女

山田守猿手の粟の鳴子かな　しけ

曉を引板屋にかはる妻も哉　秋色

面白や水の春とは引板の音　園女

亡父の七回忌をとぶらふに、

我と同じ道なる人々來たりければ

案山子にも哀さまけじ尼仲間　智月

とまり〳〵稲磨歌も變りけり　京ちね

七度の花の初めや早稲の花　智月

茅屋つむ艪も輕き世を誰が家　秋色

どの色を分て折なむけふの菊　そめ

菊の花見に來てゐるか石敲（イシタヽキ）　かな

菊賣や障子の外も千代の聲　松吟

同じ香に菊や匂ひて色がはり　卯七妻

白菊にうはの空なる銀化粧　秋色

實や菊焙爐になりし人の肌　籠口

汲（クム）や汲め菊の素顔のけふ來ずば　花榴

すみよし奉納の内

成仲の松の祝ひかけふの菊　園女尼

淋しさは素縫も同じ菊の裏　花千

菊の香ややれ誰やらが後影　唯次妻

けふの菊朗詠集を御家流　園女娘

姉だけに小菊の中に殘るかや　いち

菊を嚙む菊の葉先の揃かな　辰下

重義亭にて

世の人のしらぬ花あり深山椎　園女

抱帶とかずに宿の夜寒哉　たつ

秋獨さへられもせぬ寢覺哉　智月

旅なれてまどろむほどになな

る宵を、思寢とこそ人もし
りけれと、いふ心によりて　千子

秋の夜に寢習ふ旅の舍かな

秋の夜に使はれはたす連木哉　月峰妻

我人の合點しながら秋の空　京文字けん

彦山に詣、同國五百羅漢を
拜み侍るとて、樵の通ひけ
る紅葉谷といふ所に入る、
道のほど五六里、さらに外
の梢も見えず、同行に申侍
りける

秋の道一日悲しもみぢ谷　田上尼

かつら子の髪にさゝばや薄楓　なな

(一)謠曲「紅葉狩」の事をふくめていへり

哉里公へはじめて召され侍
りて

武士(一)の紅葉にこりず女とは　秋色

牢人の肩尖りけり秋のくれ　そめ

知てしらぬ身の程悲し秋の暮　智月

行く秋や三十日の水に星の照　園女

冬之部

仰ごとはちがひ候へどもこ
なたはまことと存ら〳〵　佐渡遊女みほの

僞とこちは思はじ初時雨

加茂貴舟夜(ヨヽ)時雨れけり川の音　定起卿娘連女

だまされし星の光や小夜時雨　羽紅

近道を阿闍梨につるゝ時雨哉　園女

神祇

此猿は社久しき時雨かな　同

常磐山元(モト)かうはいはぬ時雨哉　肥後求麻里木氏

兒の親の手笠いとはぬ時雨哉　遊女藤戸女夕霧

はら〳〵と今のは慥(タシカ)時雨哉　歩柳

蕉翁初七日をいたむ

待ちうけて涙見あはす時雨哉　遊女かや

我袖の蔦や浮世の村時雨　薄雲

さらばえをいはうか去(イナ)う神無月　きく

おく霜やけふ立つ尼の古葛籠　園女

蕉翁二七日廟參

花桶の鳴る音悲し夜半の霜　かな

木々の根の獨くつろぐ霜こぼれ　智月

置きあげる蒔畫の松の月に霜　藤戸女

銀箔を拂はゞやがて笹の霜　辰下

月影の針もてさすか冬の空　何某母

慰めし琴も名殘や冬の月　萬里

千鳥啼出れば雌か雄かの　遊女いくよ

琴程の島のなだれて千鳥哉　錦屑
柵の雪踏みちらす千鳥哉　りん

寶晉齋の許に馬下し侍りて(一)

霜焼を不二の光にこゝろ儘　園女
初雪の疊ざはりやしゆろ箒　智月
初雪や海のきはだつ葭の上　せん

蘭子東行を送る

雪に思へ富士に向はゞ故郷の繪　園女
わざとさへ見に行く旅や富士の雪　智月
佛の日誰にわかれの雪の肌　同

老のねざめのかぎりなきに

雪焼や夜毎に孫が手をふかせ　同
いふまいと思へど雪吹死出の旅　同

(一)寶晉齋は其角

雪見には殿連恥る心かな　少女さよ
少將の尼のはなしや志賀の雪　已禰尼
大雪や藪と〳〵の切通し　秋紅
月ならで日をやさはりの雪女　大坂透延尼
此頃の雪や案山子のなれの果　蓬生

京の人に逢て

白からし京の御目から江戸の雪　秋色
會者定離笹に霰や松の雪　ゆき
かはゆさや雪を負ねて歸る猫　膳所堀江氏妻
白鷺の鳴かずば雪の一丸げ　光貞妻
霜焼の手をふいてやる雪丸げ　羽紅
此足を湯屋までのさむ月も雪　辰下

次郎といへるを連れて夫の

夜咄にゆきしを

我子なら供にはやらじ夜の雪　と
蹴あぐれど裳にたまる霰かな　遊女
降りにけり落ては消る玉霰　七
吹落す木の葉に包む霰哉　錦江
しみ〳〵と子は肌につく雹哉　秋色

蕉翁二七日廟參

打ちこけて指ぬき氷る涙かな　素馨
待つ春や氷にまじる塵あくた　智月
十徳の袖は涙の氷かな　秋色
幽靈に水呑せたか鉢たゝき　智月
鉢叩夜更けて道の廣さ哉　同
富士垢離や女の上の物わらひ　訓女
しれものの舍か寒し椚木原　園女
米炊ば寒し雀の羽の音　せん
偏衫(ヘキサン)を着せても寒し假位牌　錦江

歌の島

とも寢して鍼立寒し戀の丸　秋色

路通に別るとて

見ゆるさへ旅人寒し石部山　智月
年よれば鼠もひかず寒かな　園女
鮟鱇や沓のとなへも二葉より　濃州秋色
忘花喪になく御乳の哀哉　かね
さまのよさ手から又々歸花　萬里
水仙の花の高さの日影かな　智月

いなる事ありて

冬椿神をだましに來はせぬぞ　梅曉女

岡崎村に住み侍りける頃

失はで落穂をたくや大師講　かな

石女（ウマメノ）や人形作る千團子　きち

嵐雪三回忌　題拂子

冬枯に畢竟劣る尾花かな　秋色

ある程の伊達仕盡して紙子哉　園女

さゆる夜の灯火凄し眉の劍　同

凩やこほれて畫の牛の聲　同

獨居やしかみ火鉢も夜半の伽　秋色

遊戯

寄れ枕ふり海鼠になりし鼠哉　同

御火燒の盆もの取るな村烏　智月

凩や色にも見えず散りもせず　同

凩を杖につきけり老の坂　同

我形の哀れに見ゆる枯野哉　同

芭蕉翁三七日

像の畫に物いひかくる寒さ哉　同

四七日

冬の日や老もなかばの隱れ笠　同

六七日

跡の月思へば氷るたゞき鉦　同

盡七日

噛みしだく反古伸さむ生火桶　同

酒盛や一雫にて年のくれ　同

おしよせて鶯一羽としの暮　同

年内立春

冬の春心の外や梅の花　智月

大江山柊（ゆ）しげる世なりけり　越前（き）

さゞ浪や落葉衣のしほり染　藤戸女

露は秋しぐれは冬となむ定

めてや、こそ〳〵と反古と

り出て、火桶ひとつをはり

まはす、是は何の翁ぞ、俊

成頼政をならふにもあらず、

唯ひとつにて吾冬を過さむ

となり、春より後はといは

ばあらばあらまし、われな

ばもとのつちくれこそと、

もしとはゞかく答ふべき

膝もとの折敷に糊の木の葉哉　園女

閑居

葉の音に犬吼えかゝる嵐哉　同

行年や老を譽めたる小町の繪　同

籠菊があふぎも古し年の暮　同

大年や手の置れたる人心　羽紅

へだてゆくまゝの俤かきくらし

雪とふりぬるとしの暮哉

俊成の女とは誰としのくれ　園女

答雲虎和尚　園女

來書の旨趣拜し申候、本求(一)眞不求妄は大道の根源、誰も存じ候所、憚ながら珍らしからず候、一心源頭にのほりての所作は柳綠花紅只其まゝにして、常に句をいひ歌に綴りて遊び申候ことにて候、無益の口業にて候はゞ、一切經も無益の口業にて候、法くさきことは嫌ひにて、所作所行は念佛と句と歌となり、極樂へ行けばよし、地獄へ入ればめでたし、そこに候有無分別に候、申したき事候へども歩行なりがたく候まゝ御ゆるし候へかし

和玉韻

自己念其不レ覓レ心　法灯已耀一灯心
市中點々有二明鏡一　全識人間清淨心
誰か見む誰かしるべき有にもあらず
無にもあらざる法のともし火

(一)「來書」原本「ある書」とあり、奇人談により改む

わが日の本は和歌の國にして、天地をうごかし鬼神を感ぜしめし女の歌仙、數ふるにいとまあらずとや。其三十一文字の末葉を拾ひて五七五を並べ、花は盛に月は隈なきとのみにかたよらず、花にも雪にもほとゝぎすにも、遠近の野山に心のあゆみをはこび、自在に遊ぶ人々また數をしらず。それを集め梓にゑりて、此後の人の先達になさむとは、うれしき荷擔の人なるかし。さるをこの双紙にわなみが愚なることを葉を添へよと有り、いなむにゆるしなければ、硯とうでて禿たる筆をとることになりぬ。

安永三年
甲午八月吉日

東都　田　女

平安書舗　安藤八左衛門梓

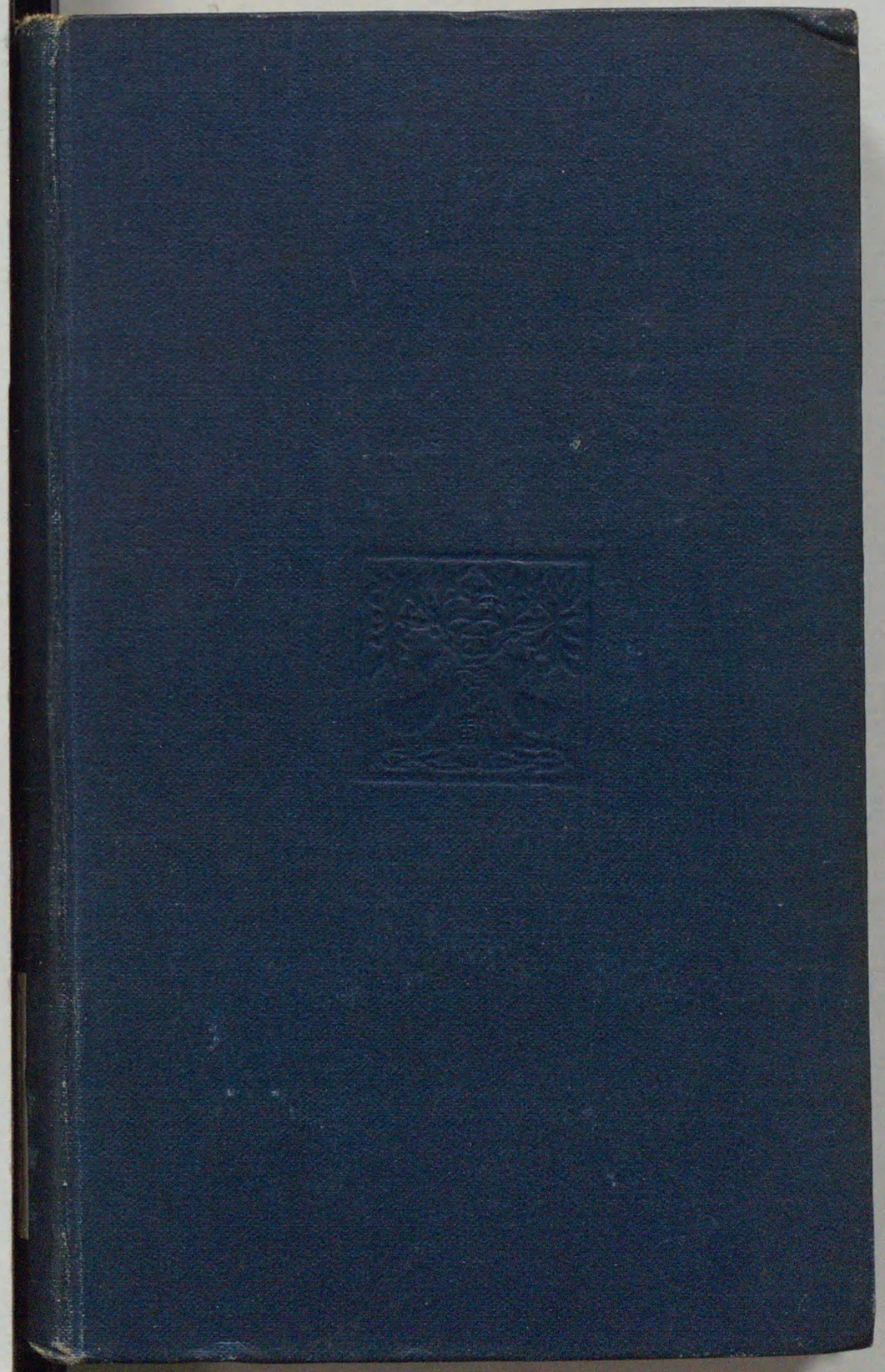
大正七年九月一日印刷
大正七年九月四日發行

有朋堂文庫
俳句集（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷部

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

不許複製